

---

# フィオナ

あゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
フィオナ

【Nコード】  
N1534R

【作者名】  
あゆみ

【あらすじ】  
とある国のお姫様と軍人の恋物語

## 序章 語り部は切と語る（前書き）

序章です。

少し長くなりますが、どうぞお付き合いください。

## 序章 語り部は切と語る

静かな夜だった。

：いや、静か過ぎる夜だった。

風の音も、星達の瞬きも、何もかも全てが凍りついてしまったような夜だった。

そろそろ秋も終わり、冬が訪れようかという季節。いつもならば冷たい風が唸り声を上げ、軽やかにその身を翻している季節だ。なのに、この静けさは一体どうしたことだろうか。

夜陰に紛れて飛び遊ぶ蝙蝠の羽音も、闇に溶ける梟の歌声も、何もかも全てが消えてしまった。

『約束よ』

その人は、白く細い人差し指を唇に当て、全てのものに語りかけた。

『あたしがここを出ていくこと、どうか、秘密にして』

お願いね、とその人は笑む。

無言のうちに、全てのものはそれを承諾した。

だからお喋りな風も、星も、動物達も、全ては口を噤んだ。何かの弾みで、間違っても溢してしまわないように。

全てのものが、口を噤んだ。

夜の帳が、物語を紡ぎ出した。

良い月夜。

煌煌と、鮮やかに光るあの月のいやはやなんと美しいこと。眼福

眼福、目の保養。

んん？ おやおや、これはお美しいお嬢さん。こんな遅い時間にどうなされました？ ほう、月が明るくて寝つけない？ ああ、確かに確かに。貴方の大きな瞳はまだきらりきらりと月のように輝いていらつしやる。その輝きでは、睡魔など近づいても来ないでしょう。

それではお嬢さん、わたくしめの物語などいかがでしょう？

そうですねえ、この月夜に相応しい、恋の物語など如何で御座いますしょう？

まだまだ未熟なわたくしの物語とて、貴方の暇つぶしくらいにはなりましょう。おや？ そちらにあられる気高き紳士殿。どうなされました？ なんと、貴方も月が明るくて眠れないと、この語部の話を共に聞いてもよろしいか、と。ええ、それはもう、勿論で御座いますとも。お客様は多い方が良いものですからね。大歓迎で御座います。ああ、そんな後ろではなくこちらの方へ。ずずいずい、と。それでは、お集まりの皆さま方に、まずは感謝を致しましょう。

今宵、この素晴らしい月夜。ようこそお集まりくださいました。この語り部の物語、楽しんで頂ければこれ幸い。

とまあ、挨拶などはほどほどにして、物語を始めましょうか。それでは皆様、お静かに。今宵は月がとても美しいとは思いませんか？

ほら、御静聴下さいませ。そうつと耳を澄ましてみると、優しく柔らかな月のささやきが聞こえてくるようでは御座いませんか。

ああ実に、それ程までに美しい。

さて、皆様様のお時間を、ちよいと拝借して語りまするは、それは儚き物語。美しき月夜を舞台にこの物語。わたくしめのような若輩者が語るのもどうかと思いますが、どうかどうか、最後までお付き合いくださいます。

切。

語部は、小弦を爪弾く。

夢き調べは風に乗り、月明かりに溶けた。

それでは、前置きはこの辺に致しまして、そろそろ始めると致しましょうか。東の空が白み、鮮やかな紅に色付き始める前に、話を始めてしましましょう。

これは、夜の物語にございます。

お日様には少々悪いのですが、きらきらと眩しい日の光の下では趣も何もありません。淡い淡い、柔らかな月明かりの下でこそ映える物語。月のような、夢い光の下でこそ映える物語。

それでは皆々様、ごゆるりと。

## 第一章 月の瞳と闇の髪（前書き）

第一章始まりました。

どうぞ、ご覧ください。

## 第一章 月の瞳と闇の髪

1

昔々あるところに、という出だしは皆様も幼い頃から幾度となく聞いたことでしょう。この物語もそれとおんなじ。昔々のどこかの国での物語で御座います。

おや、それでは聞く意味がないと仰るのですか？ お客様、短気は損気と申します。もう少し、二言三言聞いていかれても構わないでしょう。この物語はね、特別なんです。まだ誰にも語ったことがないのですから。ふむそれならば、と。そうそう、お掛けになって下さいな。

さて、この物語は皆々様のお爺様のそのまたお婆様のそのまた……、と続き、誰の記憶にも残っていないほど古い話で御座います。

ま、ほんの少しこの語り部が味付けをしておりますがね。

そういう訳で、昔々、どれほど古い話なのかも分からぬほど遠い昔、『武の国』と名高いとある王国が御座いました。それはかつて栄華を極めた今は無き大国、スワラージ。

その国に、一人のとても美しい姫君が居りました。

まるで夜の闇のような色合いの真っ直ぐな長い髪に、とろりと蜜を流し入れたかのような鮮やかな金色の瞳。やわらかな白桃の頬に、赤い唇。

『上質な宝玉よりも美しく、白鳥の翼よりも優美な方だ』

彼女を一目でも見た者は皆、口々にそう語り、賛美しました。

彼女の名前は、“マリア”と言いました。

『なんと美しく、閑雅なお名前だろうか』

その名前を一度でも聞いた者は皆、口々にそう語り、賛美しました。

城の一室であたしは一人、机に向かっていた。

硝子の万年筆をゆらゆらと所在無さげに揺らしながら、月光がそれに反射して輝くのをぼんやりと見つめる。

少しだけ、見惚れる。

きらきらと光りを反射するその様は、とても綺麗だと思ったから。……けれど、あたしの思考はゆらゆらと違ふところばかりをさ迷う。  
『私のフィオナ』

想うのは、以前、あたしをそう呼んだ一人の男性のことばかり。穏やかで優しい声が、口調が、まだあたしの中に残っている。

名前も知らない人だった。

彼は自分のことは何一つ語ろうとはせず、あたしに純白の薔薇の花を一輪渡して、去っていった。

それは『フィオナ』という名前の清らかな花。

花瓶に活けて毎日水を変えてはいるけれど、少しずつ、萎れてきている。あたしはその真つ白な花に、少しだけ見惚れる。あの人の姿を思い出すから。

彼は、あたしのことを“マリア”と呼ばなかった唯一の人。

……本当に、美しい人だった。

絹糸のように柔らかで艶やかな髪も、わずかに憂いを帯びた瞳も、まるで月の色を塗ったかのような鮮やかな金色。優しく微笑む形の良い唇に、柳の眉。細身で、けれど均整のとれた逞しい肢体にこの国の黒い軍服を纏っていた。

あたしは彼の名前が知りたかった。

けれど、城内に居る兵士たちに聞いても、両親や大臣たちに聞いても、誰に聞いても彼の名前を知る者は居なかった。けれど、まさか ルンペルシュティルツヒエンじゃあるまいし。そう思って、あたしはもつと色々な人に、たくさんの人に聞いて回った。

それでもやっぱり、彼の名前を知る者は誰一人として居なかった。

……いや、何人が知っているのだろうと思わせるような人も数名は居たが、誰も教えてはくれなかった。知りません、お答えできません、申し訳ありませんとそればかり。

だから、あたしは考えた。彼に相応しい、素敵な名前は無いものだろうかと。そして思い付く限りのたくさんのお名前を考えた。

けれど、無理だった。

どんなに一生懸命に考えても、どんなに沢山のお名前を考えても、どの名前も彼の雰囲気とはどこか違っていた。相応しくないように感じた。あの物憂げで優しい瞳には、どんな名前も似合わないような気さえしてきた。それで結局、あたしは彼のことを『あの方』と呼ぶことにした。

あたしに、美しい薔薇のお名前をくれたあの方。

あたしは、あの方に相応しい名前を知らない。

……あの日から、一体どれだけの時が過ぎただろうか。

あれから、もう三年だ。

あの薔薇はもう随分と前にすっかり枯れ落ちてしまった。当時十五歳だったあたしは十八歳になり、成人を向かえていた。最近ではお父様があたしの婚約者を探し始めている。見ず知らずの方との結婚なんて、あたしは少しも望んでなどいないのに。出来るなら、愛しい人と。分かりあえる人と共に生きたい。運命のように引かれあう人。きっと、それはあの方だ。初めて出会った時のあの胸の高鳴り。そして、他人とは思えない安心感。これが運命と言うものなのだ、あたしは心から思ったのだ。

ああ、日一日と時は確実にすぎ去っていく。夏がそろそろ終盤に差し掛かり、秋が訪れようとしている。冷たい風が地上を這い、虫たちは歌い始めた。わずかに色付き始めた木々に、あたしはほう、と溜め息を吐く。

……あの方は、一体誰なのだろうか。何故あたしの前に現れたの

だろうか。たった一度のあの出会い。あれには、一体どんな意味があったのだろう。

夜は、今日も煩く鳴いている。

三年も前の出会いが、あたしの思考をかき乱す。

風の舞いも、虫の歌も、今はもう愛でている余裕なんて無い。あの方の姿だけが、あたしの脳裏を騒がす。

彼に逢いたい。

想うのは、そればかり。あたしが想うのは、名前も知らない一人の男性のことばかり。あの日以来、彼はあたしに逢いに来てはくれないけれど、日に日に、あの方を思っている時間が長くなってきているような気がする。毎日あの方を想い、今は亡き真白な薔薇の花を懐かしく思う。

名前も、年齢も、何一つ分からない不思議な人だけど、この想いは止められない。あの方への想いは日に日に大くなるばかり。

あたしは今日も、あの方を想っている。

あたしはまた一つ、溜め息を吐いた。

コンコン。

にわかに、扉を叩く音がした。

「誰？ エミリア？」

あたしは特に親しくしている使用人の名前を呼んだ。エミリアは、よくあたしの話し相手になってくれるから。

「私です」

扉の向こうからの、男性の声。良く知った人ものではない声に、あたしは一瞬動きを止めた。けれど、その響きの懐かしさに、胸が高鳴る。

心地よく響く、低い声。

穏やかで優しいこの声、口調。ああ、なんて懐かしい。これは運命の音色だ。

「今晚は、私のフィオナ」

ずっと待ち侘びていた、あの方の声。『フィオナ』と、あたしを

呼ぶのは彼以外にはいないのだ。やはり彼は、あたしの運命のひとつ！  
「今つ、開けるから！」

勢い込んで、あたしは扉の方へと駆けて行った。扉を開け、その人の姿が目に入ると、自然と笑みが零れる。彼はその場にひざまずき、あたしの右手の甲に口付けをした。そしてあたしに真白な『フイオナ』を一輪差出し、口許に柔らかな笑みを浮かべる。

「ご無沙汰しておりました」

その微笑みを、あたしは見つめる。

「……貴方は、誰なの？」

「この国の軍を束ねている者です」

彼の声は穏やかにだ。けれど真実を隠し、曖昧に誤魔化そうとしているような返答に、あたしはわずかに目を細めた。違う。あたしが知りたいのは、そんなことじゃないのに。

「貴方の名前を教えてください」

「どれをお教えしましょうか」

彼は少しふざけたように、くつりと笑った。

「この髪と瞳の色から“月”<sup>ルナ</sup>と呼ぶ者、戦場での私を見て“獵犬”<sup>ブラッドハウンド</sup>だの“狼”<sup>ウルフ</sup>だのと呼ぶ者もいますね。他にも、幾つもの名を持つて

おります」

「……あたしは、あなたのことを何と呼べば良いの？」

あたしは彼の頬にそつと触れる。

すらりと伸びたその長身は、優に百八十を超えるだろう。あたしは高い位置にある月色の双眸を見上げ、覗きこんだ。彼はやはり、柔らかな笑みを浮かべている。

「お好きなように」

その言葉に、あたしはうつむく。

「……貴方に似合う名前が思いつかなかったの。貴方には、どれも相応しくないような気がして」

彼は少しだけ目を細めると、あたしの頬に口付けをした。まるで鳥のついでにみみたい優しい口付け。拒むことはしなかった。彼は、

寂しげに笑う。そして窓の外を見つめ、今日の月はとても美しいです  
ねと呟いた。

「私はもう、帰ります。あまり長居をしては、気付かれてしまう」  
誰に、とか。どうして、とか。聞きたい事は沢山あった。けれど、  
どこか悲しげな彼の横顔を見つめていると何もきけなくなった。け  
れど寂しくて、愛しくて、だからひとつだけ、我儘を聞いて欲しく  
て問いかける。

「もう、帰ってしまうの？」

彼は、静かに頷く。

「月夜に狼を部屋に招き入れても危ないだけです」

「あたしの質問に、答えてはくれないの？」

「……申し訳、ありません」

そう言つて、彼はあたしに背を向けて取っ手に手を掛けた。行か  
ないで、と叫びたかった。ぴしりと伸びた背中に、抱きつきたかつ  
た。

「さようなら、マリア王女」

「待って！」

彼の背中に、あたしは声をなげる。

振り返ることはせず、かれはひとと動きを止めた。

「何でしょう」

彼の背中に、あたしは願う。

「……あたし、“フィオナ”が良い」

マリアなんて、呼ばないで。貴方だけは、貴方だけの名で呼んで  
欲しい。“フィオナ”という、美しい名前。どうかどうか、お願い  
だから。

願えば、彼は頷いてくれた。

「さようなら、フィオナ」

「……さようなら」

ぱたん、と悲しい別れの音。

あたしは静まった扉に力なく手を振った。

『フィオナ』

この名前は、好き。

あの方があたしにくれた、あの方だけが持つあたしの名前。いい人 gave くれた、特別の名前。

純白の、清らかな花。

夜の闇に映える鮮やかな白。

清く美しい、薔薇の花。

『マリア』

この名前は、嫌い。

誰もが美しい名前だ、閑雅な名前だと賛美する。だけど、それはあたしの地位に送られたもので、この国の“王女”に送られたものだ。

掃いて捨てるほど貰った言葉。

こんなもの、あたしはいらない。

あの方だけは、何も言わなかった。

それが、とても嬉しかった。

けれどあの方は、自分のことすらも、自分の名前すらも言おうとはしなかった。

それが、とても切なかった。

まるで貝みたいに口を閉ざした貴方。

貴方は、一体誰なの？

・

あれから、二ヶ月が過ぎた。

あたしはあの時と同じように、万年筆を揺らしながら机に向かい、

あの方が訪れるのを待っていた。ゆらゆらと揺らすたびに、万年筆の柄がきらきらとわずかに光る。今日も、月が明るい。きらきらと、月は詠う。

あの優しい声に触れることができれば……。  
想うのはそればかり。

あの方から貰ったフィオナは今日も机の片隅で咲いている。もうすっかり萎れてしまったけれど、未だに飾っている。

……愛しい。

あの方が、誰よりも愛しい。苦しいくらい。  
あたしは萎れたフィオナに口付けをした。微かな香りが鼻孔をくすぐり、花びらが一枚零れ落ちる。

ああ、あの方は、まだだろうか。

今日も、あたしに逢いに来てはくれないのだろうか。窓から空を覗けば、月はきらきらと詠っていた。星はふわふわとまどろみ、鳥達は羽音を響かせていた。

……良い夜だ。

月が明るい分、闇が濃い。こういう夜は、森がざわめく。なぜかは知らないけれど、いつもより少し浮き足立つ。

あたしは月を見上げた。

完璧に満ちた金色の月に、あの方の瞳を思い出す。

「……逢いたいなあ」

こついう夜は尚更、あの方を思い出す。

「誰に逢いたいのです？ 私のフィオナ」

わずかに、扉の軋む音。それとほぼ同時に聞こえてきた声に、あたしは振りかえり笑顔を向ける。

「こんばんは」

あたしはぱたぱたと彼に駆け寄り、その手を取った。はしたないかとも思っただけれど、今のあたしにはもう抑えられないし止められない。あたしはその術を知らないから。

「ずっと、ずうーっと貴方のことを待っていたの。二ヶ月前に逢っ

たばかりなのに、もう何年何年も、長い間逢っていなかったみたいで、寂しくて……、とても、逢いたかった」

「フィオナ……」

呟くと、彼はあたしの髪をそつと撫でた。その穏やかで優しい手付きや額にそつと触れる体温が気持ちよくて、あたしはわずかに目を細める。

ややあつて、彼は静かに口を開いた。

「……近いうちに、私はここから出て行きます。今日は、最後の御挨拶に伺いました」

「え？」

一瞬、思考が停止した。

「あの、それは、どういう、こと……？」

「私は大罪を犯しました。もう、ここには居られません」

ダイザイ……？

「私は、罪人です」

泣きそうに歪んだ表情。目が、離せなかった。

その表情を隠すように彼はあたしを抱き寄せた。

彼の胸は、腕は大きくて、暖かった。

「……けれど、貴方が愛しい。誰よりも、何よりも貴方が恋しい。

フィオナ、貴方と離れたくない」

「……あ」

彼の名前を呼ぼうとして、あたしは止まる。

貴方の名前を、貴方に相応しい名前をあたしは知らない。

「貴方を愛しています。貴方が愛しい。それ故に、私は貴方が欲しいのです。貴方の傍らを離れたくない。その髪の本一本本から指の先まで、余すところなく貴方が欲しい。……狂おしいほどに、私は貴方が欲しいのです」

彼はあたしを抱きしめながらそう言った。

強く、強く、動けないくらい強く、喋られないくらい強く、あたしを抱きしめて。貴方はあたしの肩に顔を埋めて、あたしにしか聞

こえないように言った。それはまるで、小さな鳥のさえずりみたいに。優しい色合いの黄金の髪が、優しく言葉を紡ぐ唇が、静かに光る月の瞳が、貴方の全てが、あたしを捕らえる。

貴方の存在は、まるで小さな花びらを包み込むみたいに優しい。けれど、貴方は絶対的な欲望を持ってあたしを捕らえる。

……逃れられない。

「貴方が欲しい」

静かな情熱を秘めたその言葉が、あたしを縛る。貴方は自身の欲望を曝けだす。たった一言。貴方の紡ぐその短い言葉が、あたしを縛り、捕らえる。

あたしは息が詰まってしまって、何も応えることが出来ずにただただ彼の腕の中に立ち尽くしていた。

「……フィオナ」

彼は呟く。

それは、貴方があたしにくれた、あたしの名前。

貴方があたしにくれた、美しい薔薇の名前。

けれど、あたしは貴方の名前を知らない。

貴方に名前をあげることすら叶わなかった。

『どれをお教えしましょうか』

前に逢った時、貴方はそう言って笑っていた。優しく、穏やかに、そしてわずかな憂いを帯びて。ただ静かに、微笑んでいた。

ばた、と首筋に何か冷たいものが零れた。

……涙？

泣いて、いるの？

「私と共に、来てはくれませんか……？」

涙に霞んだ声。

子供みたいに、貴方は肩を震わせて言う。

行けば危ない。

何をしたのは知らないけれど、大罪を犯したという人と共に居れば、あたしも追われることになるだろう。そしておそらく、彼に

は “王女の誘拐” という罪まで背負わせることになってしまっただろう。

きつと、いや、確実に彼もそれは理解しているはずだ。それでも、貴方はあたしに着いて来て欲しいと言う。あたしが愛しいと。すべてを、自分のものになりたいのだと。彼はわずかな狂気を持って、あたしを求めている。

それでも、あたしは

「教えて？」

「え？」

あたしは、知りたいの。

貴方のことを、もつと。

知りたいの。

「名前、を。貴方の、本当の名前を」

彼は、あたしを抱く腕に力を込める。

「……………ファド」

やっと、教えてくれた。貴方の名前。

“ファド”

異国の言葉だ。意味は確か、『運命』だっただろうか。

「ファド」

彼の腕の中で、その名前を一度呟いた。

貴方に相応しい名前だと、心から思う。

「……………はい」

これが、あたしの答えだ。

「あたしは、貴方と共に。…永遠に」

貴方を愛しています。

誰よりも何よりも貴方が愛しい。いつまでも、貴方と共に居たい。貴方の運命を、共に歩みたい。あたし達はきつと、人には見えぬ運命の糸でつながっているのだ。それに、あたしも貴方が欲しい。余すところなく、全てが欲しいの。

本当に、狂おしい程に。

あたしは豪華なドレスを脱ぎ捨てて簡素な旅装に身を包んだ。

そして必要最低限の荷物だけを持ち、ファドと共に一頭の馬の背に跨った。もつとも、その荷物も後で捨ててしまうのだけど。いつまでも持つていたら、その荷物から身元が分かってしまうことがあるらしいから。

完全な静寂を守る、城を囲うように造られた森。その中に、馬の駆ける音だけがやたらと大きく響く。

美しい葦毛の駿馬で、人を二人も乗せているにも関わらずそれを感じさせないくらい軽やかに走っていた。

「ねえファド」

あたしはファドの体に腕を回した格好のまま、少しだけ顔を上げて先刻聞いたばかりの彼の名前を呼んだ。

「何でしょうか」

「貴方は……あたし達は、どこに向かっているの？」

「遠く、です」

少しだけ間を置いて、ファドは無感動にそう答える。あたしは口を閉ざす。何故だか、もう何も聞いてはいけないような気がしたから。

本当は、もつと違うことを聞きたかったのだけど。

『貴方は一体、どんな罪を犯してしまったの？』

聞きたかった。貴方の罪を。

けれど、口から出て来たのはあの質問。意気地が無いなあと、あたしはちよつとだけ眉をひそめる。

それでも、あたしは大丈夫だと自分に言い聞かせる。

大丈夫。

そのうちに、貴方から話してくれると信じているから。  
大丈夫。

もう一度心の中で呟いて、あたしは目を閉じた。彼の背に頬をすり寄せ、そしてその態勢のまま、違うことを考え始める。  
少しやり過ぎたかしら。

風は、ふわりともいわない。

木々は、かざりともいわない。

星は、きらりともいわない。

何もかも全てがだんまりを決め込んだように、いつそ不自然にも感じるほどに辺りはひっそりと静まり返っている。これからしばらくの間、この森からは全ての音が消え去るだろう。全ての生き物になりを顰め、息を顰める事だろう。

あたしは、魔女の血を受け継いでいる。

あたしの生まれる五十年ほど前、『魔女狩り』というものがあつたのだという。陰の気を持つ女、周りの者達とは明らかに異質な女、それから、魔の力を使う女を手当たり次第に捕らえ、散々拷問をした挙句に十字架に掛けて火あぶりにするという残酷なもの。国に仇なす魔の者を根絶やしにしようとしたらしい。まじない師や、占い師。ちよつとした奇術を生業とする者まで、妖しいと思われる者は全てがその対象となった。

この魔女狩りは曾祖父の代に始まったのだが、あたしの祖母当時最も恐れられていた魔女の娘　に惚れ込んだ祖父によって廃止された。その魔女の孫娘であるあたしも、当然のことながらその血を引いている。

そして今では、魔女達による魔術部隊までもが作られている。スワージーが『武の国』と呼ばれ、恐れられている最大の理由は、その魔術部隊の存在と功績によるものだ。もっとも、あたしは魔法を使うことも空を飛ぶことも出来ないが。

あたしに出来ることは、動植物との会話。それだけ。それ以上の力は一切無い。だけど、これはある意味最も有効で、そして強い魔

法なのではないかとあたしは思っている。

人間は自然には勝てないのだ。対策を講じることが出来ても、打ち勝つことは出来ない。

あたしは自然その物に語りかけ、場合によっては見方にも付けることが出来る。この力は、多分何よりも有利にはたらくだろう。

たとえば、今日のような日には特に。

彼もきつと気付いてはいないだろう。この地面を蹴る蹄の音があたし達にしか聞こえてはいないということにも、この馬の蹄の跡が地面に付く側から消えているということにも。

全ては、あたしと約束してくれたから。出発の間際、あたしは全てのものに語りかけた。城を囲うこの 森は承諾してくれた。

自然は嘘を吐かない。

全ては、承諾してくれた。

あたしが城を飛び出したことはまだ誰にも知られていないはずだ。明日の朝、使用人が起こしに来たときにあたしがいないことに気が付く。窓が開け放たれていて、そして軍隊隊長の姿も何処にも見当たらない。

その人は、罪人。

追いかけようと兵を送り出すが、足跡すら見つからない。あたし達は逃げ切り、そしていつか、貴方はどんな罪を犯してしまったのかを教えてくれる。

うまく、終わらせる。いや、終わらせてみせる。

彼の胸に安らぎと平穏を捧げる為に。その為なら、あたしはこの力を使い続ける。

あたし達は、自然を見方に付けているのだ。

静か過ぎる気がする。

何故だろうか、星の瞬きすら消えてしまったようにも思う。

守らなければ。

私の後ろにいる、愛しい人。危険だと分かっているにも関わらず、私に付いて来てくれた女性。私の体に回しているこのか細い腕は、華奢な体は、あまりにも無力だ。

守らなければならぬ。

それはこの女性を、この国の王女を連れ出してきた私の義務であり、そして使命だ。フィオナには、一片の不安も与えてはならない。いや、きつともう、並々ならない膨大な不安を抱えているだろう。それでも、私に着いて来てくれた。

たった三度。

私達がきちんと顔を合わせたのはたったの三度しかないのだ。私を不信に思わないほうがおかしいのではないだろうか。それでも、そんな状況でも、彼女は真っ直ぐに私を見つめ、疑うことなく着いて来てくれた。そして、私を信じてくれた。

彼女は『マリア』ではなく『フィオナ』が良いと、そう言うてくれた。

だから、守らなければ。

私は、何を犠牲にしてもフィオナを守らなければならないのだ。

「ファド」

「はい」

不意に、後ろから優しい声がした。

「……大好きよ」

その言葉に、思わず涙ぐむ。

「はい……っ！」

「ファド」

あたしは彼の名を呼んだ。何だか少し、思いつめているようだったから。彼は紳士的に「はい」と短く答えた。

「……大好きよ」

彼はまた、「はい」と答えた。少しだけ、掠れた声だった。

さあっと視界が開け、森を抜けた。ゆるりと、あたしは顔を上げる。空が、白み始めていた。

「夜明けだね」

彼は、無言で頷く。

ちよつとだけ、笑った気がした。

「……キレイ」

薄紅い、わずかに紫掛かった空。

眩しくて、鮮やかで、本当に綺麗で、まるであたし達を祝福してくれているかのようだった。

## 第二章 雪にまぎれて

1

城下町を抜け、私たちは山間の小さな村に入った。

この国、スワラージは活気があり賑やかだと言われているが、それはほとんどが大きな町に入ればの話だ。小さな村に入ってしまったえば人口も少なくなり、閑散として少し寂れたような感じすらする。

「ねえ、ファド」

朝方、そろそろ疲れただろうか、とフィオナの体温を感じながら宿を探していた。馬も少し休ませなければいけないから、厩のついた宿がいいか、などと考えていると、不意に後ろから声が掛かった。

「何でしょう、フィオナ」

ちらちらと、静かに雪が降り出してきた。それが余計に、人気のないこの村の寂しさを引き立たせる。

「この馬、名前はなの？ さっきから聞いているんだけど、分からないって言うの。ファドもこの馬のこと “お前” とか “コイツ” ってしか呼ばないし」

馬と会話をしているかのようなその言い方にわずかに首を傾げながら、ああ、と私は呟いた。

「私達軍人は、馬に名前を付けたりしないんですよ」

その言葉に、え？と私の腰に回す腕に力が入る。

「どうして？ 名前がないなんて、名前でもらえないなんて、そんなの寂しいじゃない。可哀想よ」

私は馬の毛並みを撫でながら答えた。柔らかく、滑らかな毛並み。心地よい体温。彼は長く共に闘ってきた戦友で、相棒だ。きつと、こいつがいなければ戦場であそこまでの活躍は出来なかっただろう。「私達軍人は戦場で戦います。そのとき、馬が傷を負って動けなく

なったりした場合、やむを得ずその場に置いていかなければならない。時には自分の身を守るためにおとりにする事もある。……どっちにしろ、見殺しにすることになってしまいます」

ファドは言葉を切り、自嘲するように笑った。

「けれどそのとき一瞬でも躊躇えば、こっちが命を落とすことになる。たとえば今のわずかな時間であつても命に関わる。躊躇つてはいけない。だから、私達軍人は自分の馬に名前を付けないんです。

……名前を付けてしまつては、情が移つてしまいますから」

「ふうん」

少し、悲しげな声。

「……貴方が、付けますか？」

「え？」

「名前です。こいつに、名前を付けてやってください。……もう、これからは戦場に立つことは無いでしょうから」

「いいの？」

驚いたようにフィオナは言った。

「ええ。こいつにぴつたりで、とびきり縁起の良いものをお願いします」

小さな宿屋を見つけ、私はそちらに目を向けながら言った。

「それじゃあ“セレンダイン”が良いわ！」

うーん、としばし悩んで、フィオナは言った。明るく弾んだ声だ。きつと私の後ろで満面の笑みを浮べているのだろう。その顔を見ることが出来ないのが残念でならない。

「セレンダイン？ ……ああ、金鳳花、ですか？」

「そう！ ねえファド、金鳳花の花言葉って知ってる？」

「……いえ」

あのね、とフィオナは少しもったいぶったように言う。

「“来るべき喜び”っていの！」

来るべき、喜び。

「……セレンダイン。うんっ、すごく良いわ。ねえファド、あたし

“セレンダイン”がいい!”

「“来るべき喜び”、か。良い名前だ」

「ほんと? やったあ!」

楽しげに、フィオナは笑う。

「これから宜しくね、セレンダイン」

楽しげに、フィオナはころころと笑っていた。“セレンダイン”  
も一つ、嬉しそうにいなないた。

## 2

ちらり。

ちらりとひとつ、雪が落ちた。

雪が城壁に黒い染みを残し、消える。

ちらり、ちらり。

何かを弄ぶように冷たく、何処か、意地悪く。

雪はちらちらと空を舞う。

「え?」

王女の部屋に入った使用人は、小さく声を上げた。

いつも通りの一日を迎えると、そう思っていた。先日、私はマリア様の付き人に任じられ、そのことに誇りを感じていた。マリア様はただの使用人でしかない私に気安く声を掛けてくださった。私は、マリア様を心から慕っていた。

初雪だ。

いつもより、少し早く降り出した雪。マリア様もきつとお喜びになるだろう。だから、今日も一日頑張ろう。そう思っていたのに、マリア様を起こしに行くと、その部屋は蛻の殻だった。

残されているのは寝台に括りつけられた太いロープ。そしてそれを外に吐き出す、嘲笑うかのように開け放たれた窓。

置き手紙も何も無い。

本当に、ただそれだけだった。

ひらひらと、ビロードのカーテンが重たく風になびく。冬の初めの冷たい風が私の頬を撫で、髪を弄ぶ。

終わったと、そう思った。

その日のうちに会議が行われた。

マリア王女と、軍隊隊長の二人の失踪について。

駆け落ちだろうという結論にいたった。

『駆け落ち』

使い古された言葉だ。

こんなの、古典的な恋愛小説にしか使われない言葉だと思っていた。なんてロマンチックなんだろうなんて話になるはずもなく、速やかに二人の搜索が開始された。

前国王の妃、ベアトリクス様の反対を押し切って。

その日の夜、私はベアトリクス様の部屋を訪ねた。

「ベアトリクス様、どうして二人の搜索に反対なさったんですか？」

ベアトリクス様はクスクスと楽しげに笑う。不思議なくらい、この国の王族の女性は気安い方が多い。

以前お茶を溢してしまった時、ベアトリクス様はいいのよと笑って、自ら床を拭いていた。私がやりますからと説得するのが大変だったほどだ。そういえば、ベアトリクス様は農民の出だと聞いたことがある。その所為だろうか。

「そんなに怒らないでちょうだい、エミリア。眉間の皺は癖になる

わよ？」

「茶化さないで下さい」

つんと眉間を突付かれ、私は更に不機嫌な表情をする。

カチャリ、と小さな音を立ててベアトリクス様は窓を開いた。ふんわりと、静かな風がカーテンを揺らす。

……ぞつとした。

外からの音が一切無いのだ。

風は、ある。

けれど葉擦れの音も動物の鳴き声も何もない。本来あるはずの音が、何一つ聞こえてこないのだ。

何だか不気味で、ぞつとした。

「ベアトリクス様、答えてください」

「ほら、あの子には母親が居ないでしょう？ ……マリアがまだ幼い頃に、死んでしまったから。」

私ね、マリアには誰よりも、どんな人よりも幸せになって欲しいのよ。……ううん、幸せになる権利があると思うの。あのままじゃ、可哀そうじゃない」

あれじゃまるで “お人形” だわ、とベアトリクス様は笑った。

お人形のように大切にされているのなら良いではないか、と私は思う。

「あの子達の幸せを願うなら追ってはいけない。だから、反対した。それだけよ」

これが、ベアトリクス様の答えだった。

どこか違和感がある言葉。

なんだか噛み合っていないような気がする。

おそらく、私は変な顔をしていたのだろう。訳が分からない、とも言うような。ベアトリクス様は、まるで小さな子供にするように私の頭をくしゃくしゃと撫で回した。そして全てを見透かしているような、どこか意味ありげな表情をする。

…本当に、不思議な方だ。

「大丈夫よ。彼も、マリアに手は出さないはずだから。……だって、彼は知っているんだもの」

何を、とは聞けない。

聞いてはいけない。

そんな空気。

その空気に圧されて、私はベアトリクス様の金色の瞳を見つめた。

……マリア様と同じ色の瞳。

ベアトリクス様はまたにこりとして、窓の外を眺めた。長い黒髪が、風にふんわりと揺れる。

「彼だって愛しい人を、心から惚れた人を罪人の妻にしようとは思いませんよ。愛しい人に自分の罪を背負わせることなんかできないもの。たとえマリアが、それをどんなに強く望んだとしてもね」

「……ベアトリクス、様？」

少し寂しげに、そして、少し悲しげにベアトリクス様は窓から顔を出して、白い息を吐き出した。

「……何も知らないのは、あの子だけ」

そう言っ、空を仰ぎ見るベアトリクス様はとても綺麗で、そして可憐に見えた。もう既に還暦を超えているとは思えないほど、美しい。

ああ、そう言えば、

軍隊隊長も綺麗な金色の瞳をしていた気がする。

ベアトリクス様の横顔に、私はぼんやりとそんなことを思っていた。

3

「なっ、フィオナ！？」

フィアドはあたしを見るなり目を見開いて声を上げた。

「まあ失礼ね、人の顔を見るなり大きな声を出したりなんかして」

小さな、お世辞にも綺麗とは言えない宿の一室。あたしは自分の髪を一房抓み、クスクスと笑った。

ファドが買い物に行っている間にやったのだ。まあこういう反応だろうなというのはなんとなく想像していた。

「ジョー（１）かデラ（２）か、あたしはどっちなのかしらね。でもまあどちらも賢者には変わりないわ。それとも、あたしは愚か者のアン（３）かしら？」

腰まであった長い髪は、肩口までに短く切りそろえた。頭を左右に振ってみると、毛先がぱさぱさと顔に当たった。

「すごく頭が軽いわ。これ、自分で切ったのよ。どう？ 初めてにははなかなかうまいと思わない？」

「そんな……、どうして」

ファドはあたしの髪に触れ、呟く。

あたしはスプリングの弱くなったベッドに腰を降ろし、髪を首の後ろで一つにまとめながら答えた。ベッドが、ぎい、と小さく音を立てた。

「あたしは国民に知られ過ぎているから。ほら、この髪って目立つでしょう？ それに、国民の中では“王女は長い黒髪”って定着していると思うのよ。だから、この髪だけでもなんとか出来ないものかしらーって思っで。それで切ったの。おかみさんに鋏を借りてね。

式典とかの度にパーティーに参加させられるんだもの。あれって正直、すごく面倒なのよね」

お父様は成金趣味だから、と続けようとしたとき、不意にファドはあたしを抱きしめた。

「……すまない、私の為に」

「大丈夫よ、あたしの髪、伸びるの早いんだから。そのうちまた元の長さに戻るわよ。それにね、これは貴方の為じゃなくて、あたしの為なのよ。あたし、一度でいいから髪を短くしてみたかったの。

……それとも、髪の長いあたしじゃなきゃ嫌？ 髪の短いあたしは

嫌い？」

「そんなことは無いが、しかし……」

あたしはフアドにっこりと笑いかけ、続ける。

「それなら何の問題もないわ。やだ、そんな顔しないでよ。ねえフアド、貴方に着いて行くって決めたのはあたしなのよ？ あたしは自分で、貴方と生きていくって決めたの。誰かに言われて仕方なく着いて来たわけじゃないの。これくらいのこと、何でも無いわ。そんなことより、これからの予定を決めちゃいましょうよ。明日にはまた出発するんだし、とにかくにもまずは逃げ切らなくちゃ始まらないもの」

「そう、ですね」

フアドはあたしから一步離れると、口許に申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「それからね、フアド」

「何でしょうか」

あたしはフアドの襟首を掴んで力任せに引き寄せ、視線の位置を同じにする。そして金の瞳を強く見つめた。

「そういうの、止めよう？ そういう堅苦しい喋り方するの、止めて欲しい。それからね、『王女だから』とか『女だから』っていう遠慮もこれからは一切無用よ。城を飛び出した時点で、あたしは『王女』という地位を放棄しているの。あそこから逃げ出した以上、あたしはもう王女ではないの。それに、『王女、王女』ってぺこぺこされるのはもう嫌で、もう本当にうんざりしているの。鬱陶しくて。お願いだから普通にして。」

あたしはね、対等の立場の人間として扱って欲しいの。足手まといになるような事はしないし、そうなるような事があれば捨て置いて行ってくれても構わない」

フアドに出会って、あたしは初めて自分で選択することを求められた。自分の意見をはっきりと言える場を与えられた。今ここで、フアドの意のままに動くお人形にはなりたくない。あたしは、変わ

りたい。もう“お人形”に戻りたくはない。

“対等の”人間として扱われないのなら、あたしは、ファドと一緒に居られない。どんなに愛されていたとしても、それだけは譲れない。……お願いだから、どうか、貴方まであたしをお人形にはしないで。

あたしはファドの襟首から手を離し、もう一度その瞳を覗きこんだ。

「……分かりました」

「だからっ！」

もう一度襟首を掴んでやろうと手を伸ばすと、ファドはそれをひらりとかわし、クスクスと悪戯っぽく笑い出した。

「ファド？」

「分かったよ。ほら、これで良いんだろ？」

そう言つて、あたしの頬に口付けをする。

……なんでだろう。

何だか、変に照れる。急に口調が変わったからかもしれない。初めてって訳じゃないのに、頬が熱くなったような気がした。ファドに背を向け、頬に両手を当ててみると、本当に少し熱くなっていた。「ほら、これからの予定を決めるんだろ？ さつき町で地図とか入り用な物を買ってきたんだ」

ファドは朗らかに笑い、机に地図を広げてあたしに手招きをした。

「あたしはね、対等の立場の人間として扱って欲しいの」

そう言つて、真摯な瞳で私を真っ直ぐに見つめてくるフィオナに、私は少なからず驚いた。そして、続いた言葉にも。『足手まといになるような事はしないし、そうなるような事があれば捨て置いて行つてくれても構わない』。まさかフィオナの口からそのような台詞が出てくるとは思わなかった。

……ずっと、見つめていたのだ。

三年も前から、ずっと。

だから私はフィオナのことはある程度把握しているつもりでいた。確かに、芯の強い娘だとは思っていた。とはいえ、父親や祖父母、大臣達や使用人達にそれは大事にされ、蝶よ花よと育てられてきたお姫様だ。まさかこれほどまでだとは思わなかった。もしかしたら、どこかで差別していたのかもしれない。フィオナは、“女”で、そして“王女”だから、と。

私の襟首から手を離し、じつと顔を覗きこんでくるフィオナを見て、何故だか少し意地の悪いことをしてやりたくなった。

……やつ当たり、なのかもしれない。自分の知らない一面を見せられた事に対する、やつ当たり。私はいつからこんなに子供っぽい人間になってしまったのだろうか。心から好いている相手を正確に理解できていなかった、ということに対する自己嫌悪。そして、罪悪感。

それをその相手にぶつけてしまうなんて、今の私は酷く子供じみている。

全く、以前の私からは想像も出来ない。

「……………分かりました」

「だからっ！」

大人気の無い行為だと分かっているのだが、思わずやってしまった。こうなったらもう後には引けないので、調子に乗ってみることにした。

「分かったよ。ほら、これで良いんだろ？」

フィオナの顎に手を掛けて持ち上げ、その頬に口付けをした。気障な行為だと分かっているのだが……まあ良いだろう。

フィオナはもともと上気していた頬を更に紅く染めて私に背を向けると、それを隠すように頬に両手を当てた。その姿がやけに可愛らしく見えて、私は思わずクスリと笑いを漏らした。

頬への口付けは以前にもしたことがあるはずだが、そのときはもっ

と平然としていたように思う。不思議だ。

「ほら、これからの予定をきめるんだろ？ さつき町で地図とか入り用な物を買ってきたんだ」

机に地図を広げ、フィオナに手招きをすると、フィオナは振り向いてにつこりと笑顔を向けてきた。私は慌てて緩みきった口許を隠す。

……敵わない。

私はこの笑顔に惚れたのだと再認識した。

本当に、フィオナには敵わない。

そう思いながら、私はフィオナに気付かれないようにそつと溜め息を吐いた。

……あの事さえなければ、と私は思う。

それこそが私の最大の悩みであり、そして最大の罪だ。それさえなければ、と私は変えようのない事実に齒噛みする。

あのことは……、あのことだけは絶対に気付かなくてはならない。

私はもう一つ、フィオナに気付かれない様に溜め息を吐いた。フィオナ。貴方という限り、私の罪は永遠に終わらない。

私は、終わりようのない罪を背負っている。

フィオナ。

私は、お前の  
：

## 第二章 雪にまぎれて（後書き）

ここに注釈を…

1 ジョー…若草物語の登場人物。家計の為自慢の髪を切り、お金に換えた。

2 デラ…賢者の贈りものの登場人物。恋人へのクリスマスプレゼントを買うために自慢の髪を切り、お金に換えた。

3 アン…赤毛のアンの登場人物。髪を染めるのに失敗してしまい、長かった髪を切り落とした。

### 第三章 月の光と罪の名前（前書き）

二人の過去のお話

### 第三章 月の光と罪の名前

1

あたしは、白い百合の花が嫌い。大嫌いだ。多分、世界で一番嫌いな花。

あの花は、マリアという名の聖人の象徴だから。

……お父様は、よく言っていた。

『これは、お前の花だ』

……だから、あの花は大嫌いだ。

そして何より、“マリア”という自分自身が心の底から気に食わなかった。預言者を産んだというあの女性の名が、気に入らなかった。

この“マリア”と言う名が、いや、“マリア”という自分自身を、私は何よりも嫌っていた。早く、死んでしまえば良いのと思うくらい。

緩慢な歩みの死が、ゆるゆると、いつまでも来ない死が、疎ましかった。

「早く、来ないかなあ」

あたしは何度、この台詞を吐いただろうか。

・

あたしが十四歳のとき、国内外で戦争が頻発していたらしい。

『らしい』と言うのは、その全てがあたしの知らないところで起きたことだったから。まるで目隠しをされたみたいで、あたしにはその実態を知ることが一切許されていなかったから。国の威信を賭け

た戦いだとお父様は言っていたけれど、その内容があたしに語られる事はなかった。

けれど、あたしは知ろうとした。

木々のざわつきに耳を傾け、使用人達に話をせがんだ。そして、あたしは初めてお父様に『お願い』をした。

「ねえお父様、今国中で戦争が起きているのでしょうか？ それに、使用人達の話によると今ではもう女性も参加しなければいけない程だとか。お父様、あたしも戦いに行きます。お願いです、行かせてください」

これが、あたしが産まれて初めてしたお願いだった。

お父様は一考することもなく、ただ首を左右に振った。

「何故です？」

あたしは問う。

「どうして、あたしは戦いに行つてはいけないのですか？」

この国の多くの人々が死地に向かっているというのに、命を掛けて戦場に立っているというのに、あたしだけがこのように城内で保護され安全に暮らしているのでは、国民に申し開きが出来ません。

……あたしは、何もかも全てが自分の知らないところで行われていることに我慢がならないのです。……別に剣を持たなくても良い。弓を持たなくても良いの。

あたしはただ、この国の為に戦ってくれている方々のお役に立ちたいだけなのです。お願いですお父様。どうか、行かせてください」

お父様はやはり首を横に振った。

そしてわずかに怒気を帯びた瞳であたしを見ると、こう言った。

「マリア、お前はこの国の世継ぎを産み、国を繁栄させなければならぬ身だ。戦地などという危険なところに遣る訳にはいかない。自身の役目を違えてはならん。もう少し、わきまえなさい」

「自ら志願したわけではなく、国の勝手な都合で『戦地などという危険なところ』に送り込まれた方達も居るのです。あたしは、その人達の助けになりたいのです」

「マリア」

低い声で言い、お父様はあたしの両肩に手を置いた。

「少し、わきまえなさい」

その言葉に、あたしは俯き、頷いた。

けれど、正直不服だった。

何故あたしは戦いに行つてはならないのだろうか。

何故あたしはこうして守られているのだろうか。

何故あたしはお父様の言いなりになっているのだろうか。

そして何より、何故あたしはお父様に逆らえないのだろうか。

そう考えていて、あたしは自嘲じみた笑いを洩らした。

……嗚呼、まるで萎れた花みたいだ。

砂漠の真ん中で、明日を諦めてしまった花。

降る事のない雨を願いながら、しょんぼりと萎れてしまった哀れで惨めな花。

お笑いだ、と思う。

あたしは王女の身でありながら、国民の為に出来ることが何一つとして無いのだ。まるでガラスケースの中に飾られたお人形みたい。世に出る術も世を知る術もなく、黙ってじっとしていることしかあたしには出来ないのか。

きつとお父様もこう思っている。

『人形のように大人しくしていればいいのだ』と。

お父様はあたしには自我が無いとも思っているのだろうか。あたしは生きた人間で、自我だってちゃんとある。もう嫌だ。こんなお人形みたいな、飾り物みたいな暮らしはもううんざり。

“マリア”なんて聖人の名前なんか付けたりして、本当に馬鹿馬鹿しい。

こんなの、あたしには一番似合わない名前だ。こんなことなら、裏切り者の名前でもつけてくれれば良かったのに。“マリア”なん

て呼ばれても、あたしに出来る事なんて、何もないのに。

……だけど、あたしは知ろうとすることを止めなかった。

お父様への、せめてもの反抗だ。あたしは今まで以上に色々なものに耳を澄ますようになった。自分で見る事が出来ないのならせめて、色々なことを聞いておきたい。その実情を、ほんの少しでも知っておきたい。

だから木々に、風に、星に、あたしは外の世界の話聞いた。教えて欲しいと使用人達に話をせがんだ。貴方は知らなくても良いことですよと諭されたり、行き過ぎた好奇心は猫を殺すと言いますよとからかわれたりもした。けれど、それでもあたしは教えてくれと食い下がり、頼み込んだ。せめて事実を、教えて欲しいと。

どこの国と戦っているのか、どのような理由で戦いを始めたのか、どれだけの人達が死んでいったのか、どのようにして死んでいったのか。たくさんのお話を聞いた。酷く、惨たらしい話をたくさん、たくさん聞いた。

そうして、あたしは多くのことを知った。多分、ほとんどのことを知ることが出来た。

……けれど、あたしの苛立ちがおさまることはなかった。

一層、惨めだった。

多くのことを知りながら何も出来ないことほど惨めなことはない。何もかもに、嫌気がさした。

今もたくさんの人々が死んでいつている。

切り裂かれ、大量の血液を散らし、痛み、苦しみの果てにいる。なのに、どうしてあたしはこんなにも安穩としているのだろうか。

そう考えたとき、あたしは自分がここにいない必要などないように思った。

戦場の只中にいる人達から巻き上げた税を使って生きる穀潰し。あたしはそんな生き方なんかしたくない。それならいつそ、死んでしまった方がいくらかましだ。そうすれば食い扶持が一つ減る。その分が他の誰かの口に入るのなら、その方が良いのではないだろう

か。

思いながらあたしは呟く。

あたしは何故こんな所でこのうと生きているのだろうか、と。

……お父様に聞けば、きつとこう答えるだろう。

『世継ぎを産むためだ』

あるいは、

『この国を繁栄させるためだ』

……そんなこと、あたしは望んでなんかいないのに。

あたしが気に掛けているのは『国』ではない。『国民』だ。人々が平和に暮らせるようになるのなら、人々の悲しみが少しでも消えて無くなるのなら、他国と合併でもなんでもすれば良いのだ。戦争なんかせずに、相手の用件をすんなり飲んでしまえば良い。そうすれば、きつと丸く治まる。いつその事、この国なんか滅びてしまっても良いとすら思う。

そして何より、あたしは自由になりたいと思う。お父様の言う、

『こうあるべきだ』というものから逃れたかった。

女として、しおらしくするべきだ。

娘として、親の言うことは聞くべきだ。

王女として、毅然とするべきだ。

国の為に生きるためだ。

お父様の言う限りの無い束縛から抜け出したかった。

このままだと、お父様の意思のみであたしの全てが決まってしまう。お父様の決めた好きでもない相手と結婚し、寝屋を共にし、子を産み、育て、そして国のためだけに生きる。

そんなの嫌だ。

そんな人生なんかじゃない。

あたしは誰のためでもなく、自分のために生きたい。愛する人と結婚し、愛しい人との子を産み、育て、家族の為に生きる。そういう生活がしたいのに。

……だけどそんなことは許されない。

だからきつと、これからも気付かれない程度の小さな反抗をしなから、言われた通りに生きていくのだろう。人生に意味なんかいない、意味のある人生なんか存在しないのだと、とこっそり呟きながら。

だけど、ある時を境にあたしは壊れた。

だんだんと口を閉ざすようになり、食事を取らなくなり、最後には部屋からでなくなった。ただ、あたしは毎日月を眺めていた。あの月の鮮やかさは、この城に訪れてはくれないのだろうか、などと思いつつ。時折、あたしは月に向かって手を伸ばした。あの明るさ、優しさを手に入れたくて。

あたしは月ばかり眺めていて、城内の何にも関心を示さなくなった。きつと、自分の人生を諦めることが出来なかったから。自分の為に生きる希望を、捨て去る事が出来なかったから。あたしは無意識のうちに、大きな反抗心を育てていたのだ。心の容積を上回るくらいに。

そして、その人は、突然に現れた。

あたしは十五歳になった。

戦争も終わった。

そして、一つの出会いがあった。

黒い軍服を着た、まるで月のような人。

その人は、あたしに白い薔薇の花を差し出し、呼びかけた。

『私のフィオナ』

そのとき、あたしは救われたのだと思う。  
たった一言。

その人の、その一言で。

相変わらず、あたしは白い百合の花が嫌いだった。

何より、“マリア”という聖人の名を持つ自分自身が気に入らなかった。ガラスケースに飾られた人形のような自分が、大嫌いだった。

た。

けれど、そのときあたしは“フィオナ”になったのだ。それ以来、あたしはその人を慕い続けた。月に想いを馳せ、真白な薔薇を夢に見るようになった。彼が愛しく、そして恋しかった。月のように美しい人。

あたしは夜毎にその姿を想っていた。

……そして、今に至る。

## 2

俺は十五歳の時に軍隊に入隊し、その二年後、十七歳の時に軍隊隊長に任命された。

日々剣技や馬術、格闘などの 武芸十八般の特訓に明け暮れ、磨きをかけ、そして未成年にも関わらずこの地位まで上り詰めた。

異例とも言える、早過ぎる昇進。

周りの奴等には『獵犬』だの『狼』だのと呼ばれ、そして畏怖された。敵のものと味方のものともつかない屍の山を築き、踏み越えて戦場を駆け抜け、剣を振るい、敵の心臓を貫き、首を撥ねた。

俺の剣技の前には、鋼の鎧などほとんど無意味だった。

敵国の奴等には“血濡れの獵犬”だの“野獸”<sup>フレイム</sup>だのと呼ばれ、そして畏怖された。

恐れる物など何も無かった。

生に執着する人間の、死ぬ間際の恨みを孕んだ目。耳障りなほどに響く、人々の悲鳴や、哀叫。痛み。人を断つ感触。大量に吹き出て来る真っ赤な血液。

自分の死でさえ、俺は恐れてはいなかった。

すべてを投げ捨てて、俺は戦っていた。

そんなある日、俺は国王に呼ばれて城へと向かった。

「隊長に任命されたいならいいな、ファド・ギルト。」

いや、今は“狼”と呼ばれているのだったか。確かに、お前の放つ空気は腹を空かせた狼のそれとよく似ている」

少し冗談交じりに言う王の前で、俺は方膝を付いて頭を下げる。

「……それで父上、本日はどのようなご用件で？」

「父と呼ぶな。誰が聞いているとも分からんのだから。……全く、一体何の為に前等母子に『ギルト』の姓を背負わせたと思っている」

「……ギルト、……罪<sup>ギルト</sup>、ね。母さんも良く言っていたよ、アンタに国から追放されて得た物は金と罪の名前くらいだね」

母の口から聞かされ続けた恨み、辛み。忘れる事のない、悲しい声。思いたしながら半ば呟きのように言っ、俺は王を見上げた。これでもかというほどの金や銀、宝石の散りばめられた趣味の悪い豪華な部屋。国民から掻き集めた血税の完成品だ。忌々しくて息が詰まる。

「確かに使用人に生ませたあんたの子だとバレたら大事だよな。だが俺は誰にバレても構やしない。お前の都合なんて知ったこっちゃないんだ。それで、用件は？俺は早く帰って馬の世話をしなきゃならぬのだがな」

……ファド・ギルト。

運命の罪か、それとも罪の運命か。

自身に対する戒めか、それとも俺達母子に対する戒めか。

この男は自ら手を出した女に『罪』という姓と金を与えて国から追放した。

俺は立ち上がり、王を睨みつける。

……全く、見ているだけで殺意が湧いてくる奴なんてコイツだけだ。こんな奴が国を担っているのかと思うと反吐が出る。実に不快だ。不愉快極まりない。この男の息子として生を受けてきたことだけが、俺の人生で最大の過ちだ。

「最近エレイジアとの戦が終わわり、国もある程度落ち着いてはきた

んだが、今度は西のグノースの動きが不穏だ。それで、娘の護衛を頼みたくてな」

「娘？ …… ああ、例のマリア王女様か。見たことはないが、なかなか美しい娘だそうだな。良いのか？ 俺などに任せてしまつて。ともすれば、あんたへの腹いせに押し倒してしまつかもしれんぞ？ 俺はもともと、産まれた時から人の道から外れているんだ。今更、何も躊躇う必要など無いからな」

俺はくつくつと低く笑い、王を見上げた。

金鍍金でもされたような趣味の悪い髪と瞳。俺と同じ、鮮やか過ぎる金色。

最悪だ。

「……下衆が。口を慎め」

王は苦々しいと言つように俺を見下ろした。いや、見下<sup>みくだ</sup>した、という方が正確だろう。卑しいものを見るように、王は一段高くなつた玉座から俺を見下す。

「ははっ、これはこれは随分と口の悪い。それで、どうなさるのです国王サマ？」

「なんてことはない。そうなつたらお前を始末するだけの話だ。命が惜しかったら止めておくんだな。 詳細はこれにまとめてある。来週までに返事をよこせ」

「はいはい」

別に惜しむほどの命など持ち合わせてはいないけれど、と内心舌を出しながらやる気のない返事を返し、床に放られた封書を拾い上げる。

「それでは、失礼致します」

心中で早く死んじまえと毒づきながらも折り目正しく頭を下げ、退室した。

正直、引き受けるつもりはない。

人を殺せない仕事など退屈だ。

俺は堂々と殺しが出来るから軍人になることを決めたのだから。

殺しは、俺を心地よく酔わせる。麻薬にも似た快樂だ。人を殺せない人生など、きつと退屈だ。

……ああ、けれど。

案外、面白いかもしれない。

聞いたところによると、その姫君はまるで白い百合のように美しく、そして清らかな娘なのだという。

馬鹿馬鹿しい。

そういう奴ほど手におえないというのに、何を言っているんだか。百合。

確かに美しい花だ。それは認めよう。

大きな花びらが広がり、茎がすらりと伸びたその様は確かに華やかで美しい。花言葉も清純だの潔白だのとそれらしい意味合いのものが付いている。

しかし、百合ほど皮肉な花はない。

白は清らかな色だ。だが同時に、白は何よりも染まり易い色でもある。百合の花粉は強く香り、花びらや服につけば、それは得てして取れ難い。そしてその香りはむせ返るほどに甘く、どこか官能的ですらある。

それはつまり、何かに溺れたときそこから抜け出せなくなるってことだろうが。

いくら白く清らかで純粹と言っても、所詮は世間知らずのお姫様だ。口説き文句の一つ二つで簡単に落ちるだろう。精々遊んでやるうじゃないか、腹違いの我が妹よ。

……はっ、お笑いだ。

兄妹で、揃って道から外れるのだ。

くつり、と俺は笑った。

あのクソ親父の慌てふためく様を見るのもまた一興。  
引き受けてやろうクソ親父。  
少し、本気を出してやるよ。

・

……引き受けなければ良かった。  
今になって、心底そう思う。

引き受けると返事をした次の日の晩、俺はこっそりと城内に忍び込んだ。憎き国王の一人娘、腹違いの妹。麗しのマリア王女サマとやらのご尊顔を拝むためだ。

もちろん、その姫君には気付かれない様に、だ。

月の明るい夜。

その人を見て、俺は息を飲んでいた。

月が煌煌と差し込む城の一室。そこに、彼女はいた。

まるで夜の闇のような色合いの真っ直ぐな黒髪。

凜とした、端正な顔立ちに、世を憂えたような表情。

磨き上げた琥珀を詰め込んだような、鮮やかな金の瞳。

触れれば壊れてしまいそうなほどほっそりとした体つきに、白い肌。

月を見上げ、月明かりを掴もうとでもするように手を伸ばすその表情はただひたすらに楽しげで、わずかにやつれたような感じが彼女から幼さを消し、病的な美しさをかもし出していた。

それが二つ年下の、俺の妹の姿だった。

まさか。

俺は頭を抱えた。

まさか、本当に守ってやりたくなるとは……。

思ってもみなかった。

恋愛など、暇を持て余しているような浮ついた奴がするものだと、今までずっとそう思っていたのだ。恋愛など、暇人がやっていれば

良いのだと。自分には関係の無い、縁の無いことだと思っていた。それなのに、俺は見入っていたのだ。

腹違いであるとはいえ、自分の妹に。

実際、自分の考えがこうも容易く揺らぎ、呆気なく覆ってしまうような物だとは思ってもみなかった。

『守ってやりたい』

この思いは、兄としてのそれではない。

一人の男としての思いだった。

……どうかしている。

俺は一つ溜め息を吐く。

まさか俺が色恋沙汰で悩むことになるうとは……。

ああ。百合は、もしかしたら俺の方だったのかもしれない。決して白くは無い。けれど、何かに溺れたとき真っ先に沈んでいき、そこから抜け出せなくなるのは俺の方だったのかもしれない。きっと今までそういうものが無かったただけなのだ。心から愛しいと、守ってやりたいと思うようなもの。自分自身の命さえ大切だと思った事などなかったのに。

けれど、現れた。現れてしまった。

決してそういう対象として見ては行けない人物が。

……本当に、どうかしてる。

これこそお笑いだ。

俺の妹、マリア。

頼むから、お前は百合のように、俺のようにはなってくれなな。

……出来ることなら、お前には気高く美しい棘を持つ者になって欲しい。

汚れ無き純白の花びらと自身を守る棘を持つ、真白な薔薇のような気高い女性になって欲しい。

その願いを込め、俺はマリアに純白の薔薇の花を渡した。

『フィオナ』という名前の、気高く清らかな薔薇の花。  
どうか願わくは、百合ではなくフィオナのような女性に……。

『私のフィオナ』

そう言い残し、私はマリアの前から姿を消した。そしてそのとき以来、常に彼女の側に控え、姿無き守護者となった。  
姿を見せる事無く、彼女を守り続けた。

そして、今に至る。

## 第四章 思惑の行方（前書き）

新キャラ登場です！

## 第四章 思惑の行方

1

「まずは、西のグノースへ逃げようと思う」

ファドはそう言って、広げた地図の上に指を走らせた。そして説明を続ける。

「グノースとスワラージは長く敵対関係にある。だから、いくら罪人の捕獲の為とはいえ、グノースはこっちの兵の入国を出来る限り拒むはず。独立心と反抗心が異常なほど高い国だから、しばらく追手の足止めをしてくれるだろう」

「オーグランドは？ 確か、オーグランドとも敵対していたと思うんだけど」

「オーグランドはチェックが厳しいんだ、国王の妹君が暗殺されてからまだ日が経ってないし、犯人も捕まっていないからね。その上もし『スワラージの王女』と『スワラージの軍人』ということがバレたりしたら、それに託けて攻めてくる可能性がある。無関係の人を巻き込む訳にはいかないから、こっちには行かないほうが賢明だな。この国は血気盛んで命知らずな人間が多いから。まあ、国民性はどうにも出来ないからね」

呟いて、頭をひねる。だがすぐにグノースに向かうのが最善だろう、ということになった。あたしはファドに、色々な国の事を知っているのね、と笑いかけた。ファドは苦笑してあたしの頭にぼんと手を置いた。

「まあ、仮にも元軍人だからね。スワラージの周辺諸国のことは大体頭に入っているよ。ああ、そうだ。それから、これ。知人に頼んで作ってもらったんだ。無くさないように、持っていて」

「ファド、これってまさか……」

あたしは手渡された物とファドの顔を交互に眺める。

だって、これって明らかに…。

「そう、偽造の旅券。それが無いと国外には出られないから。馬鹿正直に自分のものを使ったらすぐに 見つかってしまうし、だから 言ってる国内ばかりうるうるしていても、逃げ切れないからね」

名前、レオノーレ・ウィルソン。

出身国、グノース。

そしてその他諸々、自分の物ではない細かな設定。

「申し訳無いけど、国境を超えるときはフィオナでもマリアでもなく “レオノーレ・ウィルソン” になってくれ。それから、私は “フィデリオ・ウィルソン”。設定は兄妹だ。良いね？」

「うん、分かった」

頷いて、変装用にとファドに買ってもらった丈の長いコートを着込み、そのポケットに偽物の旅券を仕舞う。そして同じように帽子と伊達眼鏡を身につけた。

「それじゃあ、そろそろ行こうか、レオノーレ」

差し出された手を取り、あたしは笑みを浮かべた。

「ええそうね、フィデリオ兄様」

少し芝居掛かったように言って、あたし達は互いに顔を見合わせ てクスリと笑う。

そして宿を出て、二人でセレンダインの背に跨った。

・

「……髪を、切ってしまったのかしら」

ベアトリクス様は読んでいた本から視線を上げると、不意にそう 呟いた。

「どうか、なさったんですか？」

聞くと、ベアトリクス様は私にゆるりと視線を向ける。

「ねえエミリア、知ってる？ 『魔の力』 っていうのはね、女性の、特に長い髪に宿るものなの」

以前ベアトリクス様のお部屋を訪ねて以来、何故か私はベアトリクス様の付き人をする事になっていた。

不思議な方だと思う。

窓の外を眺めて微笑んでいた、何も無い空間にそっと手を伸ばしたりする。妖精かなにか、見えない誰かがそこにいるように振る舞うこともある。時折、違う世界の人なんじゃないのかと思ってしまうほどだ。

私はお茶の用意をしながらベアトリクス様の話に耳を傾ける。

「最近ね、感じないのよ。何も、感じないの。…なあーんにも、ね」……」

「あの子は知らなかったのね。あの子の髪は、本当に素敵だったのに。とてもたくさんの力を秘めていたのに……」

そして、私には分からない世界の話を唐突に始めたりする。柔らかく、穏やかな表情で。そんな時、私はこう考えてしまうことがある。この方は世界の全てを知り尽くしているのではないか、全てを知る術を持っているのではないだろうか、と。

「……ベアトリクス様は、何かご存知なのですか？」

ベアトリクス様はゆるゆると首を左右に振る。

「何も知らないわ。……ただ、すべてが見えてしまう」  
そして、どこか自嘲するように微かに笑った。

「……本当は、何も見たくは無いのだけだね……」  
笑って、ベアトリクス様は私に言った。

“お人形”の話をしてあげる、と。

## 2

兵士五十人からなる大隊が十五隊。二十五人からなる中隊が三十隊。十五人からなる小隊が五十隊。そして、三人一組の少人数の精鋭部隊が二組。

これが城の裏側に造られた軍の施設に常駐している兵士の数だ。

およそ二千人。

最近、これだけの人間を束ねていた男が姿を消した。アイツの本当の名前は知らない。ただ“狼”だの“獵犬”、あるいは、“月”などとも呼ばれていた。

良く考えると、本当に謎だらけな男だった。

軍の志願届けですら名前の欄は空白。十五歳のとき、奴は『武の国』であるスワラージの中隊を一つ潰して軍に入隊した。

入隊試験で一つの中隊と一人で渡り合えというのは、本来ならば有り得ないことだ。クソ生意気な若い志願者に対する虐めのようなものであったが、あの男は見事に渡り合っていた。

……というか、中隊の兵士達のほとんどが、完璧に意識を失っていた。人を殺すだけならば、ある程度訓練を積めば可能な事だ。しかし、圧倒的不利の中で誰ひとり殺すことなく、重傷を負わせることなくその意識だけを奪うと言うのは至難の業だ。

やつは高慢で、残酷な男だった。

戦いの最中、意識を取りもどし奴の心臓を狙った男は、躊躇いなく殺された。頭と胴が泣き別れになったそれを見て、奴は笑ったのだ。「折角生かしてやったのに」と、そう呟いて。

そして、ひどく生意気な男だった。

教官に名前を聞かれたときでさえ、奴は「好きなように呼べ」と言い放ったのだと聞く。

最年少だったあの男は、初めこそ“子犬”<sup>パピー</sup>などとふざけた呼び方をされていたが、それは次第に“獵犬”となり、“狼”となった。

あの男は、狂っていたと言っても良い。

あの月すらも見劣りしてしまいそんな程美しい姿とは裏腹に、異常とも言える驚異的な力と残虐性を持っていた。人を傷つける事にも、命を奪う事にも躊躇せず、ただ舞うように剣を振るう。その様は、まさに戦神。

「まず、あいつが向かう可能性があるのはグノースか、あるいはオーグランドのどちらかだろう」

“狼”が消えてから隊長に任命された精悍な顔付きの男、デリスはそう言つて、広げた地図の上に指を走らせた。

膨大な国土を誇るスワラージには、グノース、オーグランド、ソサエティ、ニーエの四つの小国が隣接している。中でも、グノースとオーグランドは以前からスワラージと長く敵対関係にある。

俺はデリスの指先を眺め、頷いた。

「……そう、でしょうね。ソサエティ、ニーエの二カ国とは国交がありますから。関係も良好ですし。『狼』でしたらすでに手回しのされていそうな所は避けるでしょう。実際、その二カ国には指名手配所を送つてあります」

「それでだ、お前はどちらだと思う、アギナルド」

そう言つて、デリスは俺に視線を向ける。

「お前の所の“エリニユエス”を出して欲しいんだ。少数の精鋭部隊をまさか二つに分ける訳にはいかんだろう」

「隊長の所の“フリーアエ”を出しては？」

デリスはふと渋い顔をした。

「……いや、あいつ等では“狼”には勝てんだろう。奴とは経験も力量も違いすぎる。両方を出してもいいが、“エリニユエス”と

“フリーアエ”は犬猿だしな」

溜息を吐き、遣り難いよなあ、とデリスは呻く。

「……そうですね。女はねちっこいですからねー、顔合わせたとたんに嫌味の言い合いとかになりそうですね。下手したら殺し合い。触らぬ神に、と言いますし」

「ああ。あいつらの間に入るなんて俺はしたくないからな。それで、お前はどちらだと思つ？」

「……グノースだと、思いますね」

「その根拠は？」

俺は地図上に視線をやり、答える。

「半分は、勘、ですかね」

「勘、だと？」

「俺の勘は良く当たるんです」

そして俺は、微かに笑う。

「それに、グノースには“ワンダーフォーゲル渡り鳥”が居る」

自由気ままな渡り鳥。

お前はどちらの国へと向かうのだろうか。

3

木枯らしが、あたしの頬を撫でて去っていった。風が強くて、歩くには少し寒い。あたしはファドの腕にぎゅうつとしがみ付き、その目線の先にあるものをちらと見た。

「フィデリオ・ウィルソンとレオノーレ・ウィルソンか。旅券も……あるな。よし、通って良いぞ」

「ありがとうございます」

グノースの国境の前、あたし達は関所の若い兵士に頭を下げる。

そして無事、グノースへと入国した。

「すごいね、内心どきどきしていたんだけど……本当に、入国できちゃった」

後ろを振り返り、関所が見えなくなったのを確認してからあたしは小声で言った。

「ああ。どんなコネがあるんだか知らないが、あいつは偽造文書を造らせたら一流だ。奴は軍にいたときからの知り合いなんだ。通り名は“鸚鵡”」

「パロット？」

尋ねると、ファドは何処か懐かしそうに口を開いた。

「そう、元軍人で、一応友人だ。あいつが軍を抜ける時、少し協力してやったんだ。奴に関する文書の類は全て破棄して、後は出国の際の手引とかね。まあ、善人ではないが、信用には足る男だ。」

あいつも、私と同じなんだ。……あいつにどんな理由があるのかは知らないが、決して自分の名を名乗ろうとはしなかった。そうしていつしか付いたのが、“鸚鵡<sup>バロット</sup>”とか、あるいは、“孔雀<sup>ピコック</sup>”という呼び名だった。実は、私もあいつの本名は知らないんだ。きっと、向こうも私の本名は知らないだろうな」

「へえ、不思議な関係なのね」

「まあね。それで、今日から二、三日パロットの所に匿ってもらうことにしたから。もう連絡も取ってある」

「二、三日って……。あたし達、早く逃げなくちゃいけないのにつ  
！」

「だからだよ」

ファドはにとまるで悪戯を成功させた子供のような表情をした。「追手の奴等もそう思っているはずだ。グノースにパロットがいることから、私たちがここに立ち寄ることは向こうも容易く想像できるだろう。」

だが、問題はその後。この先には、フィオナはもちろん、私にも知人と呼べる者はいない。となると、向こうはグノースに隣接するスワラージ以外の全ての国に兵を送るだろう。けれど、そうして隈なく探したにも関わらず私たちが見つからなかった場合、どうなるだろう？

「そっか、相手を混乱させるのね！」

「ばん、とあたしは手を打ち鳴らした。」

「そういうこと。向こうが探しつくして引き上げたところに行けば見つかる可能性も低い」

「いいと思うわ、それ。……でも、いつの間に連絡を取っていたの？」

「フィオナの知らない間にちょっとね」

「ふうん。なんか、楽しみ。あ、ねえファド。あたし、パロットさんの家に行った時もファドのこと“ファド”って呼んでいてもいいの？」

今までずっと隠していたんでしょ？ とあたしはファドの腕にしがみついたままの状態で尋ねた。

「あー…、それじゃあ、“月”<sup>ルナ</sup>で。向こうもそう呼ぶから」

「じゃあ、あたしは？」

あたしはファドの前に回り込み、顔を覗き込んだ。

「“フィオナ”は嫌だよ。絶対に。この名前は、とても大切だから。ファドだけの名前だから。

たとえそれがファドのご両親でもお友達でも嫌。ファド以外の人に、“フィオナ”なんて呼ばれたくないもの」

「フィオナ？」

あたしはファドの腕から離れ、セレンダインの毛並みを撫でながら続けた。

「この名前は…、“フィオナ”は、あたしの聖域なの」

ファドは、クスリと笑う。

そして立ち止まり、あたしの額に唇を当てた。

「分かった。それじゃあ、“セレネ”は？」

「どういう意味？」

ファドはあたしの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「月の女神様の名前。ぴったりだろ？」

セレンダインの手綱を引き、ファドはゆっくりと歩き出す。あた

しもその横に並び、ゆるゆると歩を進めた。

「フィオナ」

「何？」

「“フィオナ”と“ファド”はこれから二人だけのものってことで」

あたしは一瞬、目を見開く。ちよつとだけ、頬が熱くなる。……

ああもう、どうしてファドは、さりとこついうことを言ってくれるのだろう。

「良い？」

高い位置からの視線が、あたしの顔を覗き込んでくる。為て遣っ

たり、というか、そんな感じの笑みが、何だか悔しくて憎たらしい。それでも側にいたいと思うのは、やっぱりフアドが好きだから。

「良いよ、もちろん。でも……」

「でも？」

「手、繋いでくれたら。そしたら、そうしても良いよ」

今まで、何度も口付けはもらった。たくさん抱擁ももらった。

だけど、良く考えると手を繋いでもらったことは今まで一度も無い。

……だから、すっごく欲しくなった。

「ね、良い？」

フアドはクスリと笑う。

「仰せのままに、女神様」

4

「ゆうきーやこんこ、あーられえーやこんこ、ふってーもふってーも、まーだふーりやあーまぬうー……」

俺は窓から顔を出し、この季節お馴染みの歌を口遊んでいた。決して上手いとは思っていないが、歌うのは好きだから。

しんしんと、しんしんと雪は降る。

そして、それはやがて全てを覆い尽くし、世界を真っ白に染め上げる。月は雲に隠されて、朧な影を落としていた。町のはずれにある、小さな煉瓦造りの家。童話なんかにも出てきそうな、可愛らしい造りの家だ。窓から体を取り出し、もうじき来るであろうお客様をきよりと探す。

「……“お月様”はまだ来ないのかな、ねえ、リバティズ」

その中で、俺の頭の上を陣取っている一羽の鴉に語り掛ける。

鴉は退屈そうに一声鳴くと、開放たれていた窓から何処かへ飛び立って行った。その姿は夜の闇の中に飲み込まれ、すぐに見えなくなる。

「……ちえー。なんだよ、勝手に中に入って来たクセにさ。あーあ、

野生の鴉に名前なんか付けるんじゃないかった」

ま、別にいいケドさと呟き、窓を閉める。

「退屈凌ぎにはなったし。それに……」

火の弱くなってきた暖炉に、薪をくべる。パチパチと、木のはぜる音がした。

「よう、久しぶりだな」

「それに、待ち人も来たみたいだし。ネ、“お月様”」

俺はわずかに軋んだ音を立てた扉の方に視線を向けた。待ち人二人。相手は、懐かしい元同僚。

「それから、美しいお嬢さん。いらっしやい二人とも、待っていたよ」

俺は目を細め、にこやかにそう言った。

いつの間にか雲は風に流されて、月が明るく光っていた。柔らかな月明かりはじんわりと輝き、冷たい雪を暖める。

「さつき、鴉にフラれたところなんだ。慰めてよ」

栗色の髪。

空色の瞳。

女性のようだとも言われる顔立ち。

首筋から鎖骨にかけて彫られた、緑色の翼の刺青。

取り敢えず女に不自由しない程度の外見。

これが俺、“鸚鵡”の姿。

「ねえセレネちゃん、ルナみたいな甲斐性なしなんかやめて俺にしない？ ルナなんかよりも優しくしてあげるよ？ お金もあるから不自由させないよー？」

俺はセレネちゃんに紅茶とパウンドケーキを出しながら話しかける。目を大きく見開いて、明らかに狼狽しているその反応が新鮮で、思わず手を出したくなる。

「ルナあー、セレネちゃん俺にちょーだいよ」

「誰が渡すものか」

ちっ、即答かよ。

「セレネちゃんは俺とルナ、どっちが良い？」

「ルナ」

こっちも即答かよ。よし。少し苛めてやろうっと。

「……そんなつれないコト言わないでさア、少しくらい……ねエ？」

「え？」

セレネちゃんの座っている椅子の背もたれに手を掛け、誘うように後ろから耳元でささやき掛ける。ちらと、ルナに視線をやれば、鋭い金色と目があつた。

……あー、怒ってる怒ってる。

気にしてませんって振りしているけど、バレバレ。目が釣り上がってきている。昔はこんな表情することなかったんだけどな。ここまで惚れ込んだとは、予想外。いやはや全く、人って変わるものだねエ。

「こんなヤツ、もうやめちゃいなよ」

もう一度、耳元でささやく。

「や、止めてください！ 何なんですか貴方は！」

セレネちゃんは勢い良く立ち上がり、壁際まで走って逃げた。けれどこの行動は俺にとっては返って好都合だったりする。

「……俺のこと、キライ？」

セレネちゃんがこれ以上逃げられないようぐつと体を近づけ追い詰める。

「……綺麗な髪だね」

よく手入れされた艶のある黒髪に唇を当てると、セレネちゃんはびくりと肩を振るわせた。怯えて、泣きそふな顔も可愛らしい。こ

の世慣れしてない感じがまた……。

全く、分かってないなあセレネちゃんてば。こーんなに可愛い反応されちゃったら、余計に苛めたくなるじゃないか。

「……パロット」

不意に、後ろからルナの声がした。

「何だよ、邪魔すんな。これからなんだからサ」

「死相が出てるぞ」

ヒヤリ。

直後、喉元に冷たい感触。

そう言えばパウンドケーキを切り分けたナイフがテーブルの上に置きっぱなしだった、ような、気が、する。あら。たーいへん。もしかして久しぶりに会った元同僚のせいで大ピンチ？ 命の危機？ 絶体絶命？ うーわー、旅券だつて用意してやったのにー。今まさに匿つてやつてる真つ最中なのにー。薄情者めー。血も涙もなんにもないな、ルナの薄情者。

んー、でもまあ仕方がないか。愛しい人の為だもんね。仕方がないよね、諦めてあげるよお月様。

「……あー、はいはい、分かったよ」

両手を上げて降参宣言。

「ル、ルナっ」

セレネ嬢はルナの後ろに逃げ込み、俺を睨みつけてくる。

「あーあ、おつかない顔しちゃってー。そんなにはっぺた膨らまして唇尖がらせていちやあ美人が台無しよお嬢さん」

からかうようにそう言うてぐしゃぐしゃとセレネちゃんの頭を撫でてやる。乱暴な仕草で、もうしませんよと意思表示。可愛い女の子と遊べたからこれについてはもう満足。とはいえ、やっぱりルナの行動はやり過ぎ感があるので抗議する。

「……ちよつと遊んでいただけなのに喉にナイフ当てるなんてヒドくねえか？」

「ナイフ？」

ルナはからかうようにクスリと笑って手を開き、それを床に落とした。キン、と高い金属音を立てる。

それを見て、俺はほっと一つ息を吐いた。

「……ルナあー」

「当てたのはフォークの柄だ。当てたところで死にはしないんだ、そんなに怒るな。そんな瑣末なことは置いとくとして、お前は一体いつから他人の女にまで手を出すような見境のない奴になったんだ？ 確かにお前は以前から女好きだった。だがそれにしたってもう少し大人しかったぞ」

「だからゴメンって。今のはホントに冗談なんだからサ。てゆーか、ルナこそどうという心境の変化なの？」

「は？」

ルナは眉を寄せ、首を傾げる。そしてその表情のまま椅子を引き、セレネちゃんを座らせた。ありがとうと笑みを浮かべるセレネちゃんに、ルナも柔和な笑みを返す。あらあらまあまあ、しばらく見ない内に紳士役板に付いちやってるじゃないの。やるねえルナってばいや、やるのはルナをここまで紳士にしたて上げたセレネちゃんかそれにしてもホントに仲睦まじいこと。羨ましいなあおい。

「『恋愛なんか暇を持て余していて、尚且つ浮ついた性格のヤツがするもの』なんじゃなかったっけ？」

「……そんな昔の話を持ち出すな」

ルナの不機嫌そうな呟きに、セレネちゃんは何故か俺を凝視する。「何？ どうかしたのセレネちゃん。俺に乗りかえる気にでもなった？」

「……羨ましいな、と思って」

「え？ セレネちゃん今俺の質問無視しなかった？ うっわあー、ひどいナー」

「ルナのこと、たくさん知っているのね、パロットさんって。昔のルナってどんな人だったの？」

耳に手を当ててわざとらしく聞き返すが、セレネちゃんは何もか

も全てを聞かなかったことにして話を進める。ここまで無視される  
なんだか悲しい。おにーさん悲しみのあまり泣いちゃうよ？ 泣き  
叫ぶよ？ ねえ。

ああ、につこりとしたその表情が、『あたし何にも聞いていませ  
ん』と言い張っている。ああもう、分かりましたよ。昔のルナのこ  
と話せば良いんだね。分かったよ。分かりましたよー。

「……昔のルナねエ。頑固で礼儀知らずで無礼で無愛想でにつこり  
もしない、可愛げのないつまねーヤツだったよー。こんなところ  
ころ表情変わんなかったし。女なんか訓練の妨げにしかないな  
なんてことも言ってたもんな。そんなルナに愛しい人が出来たなんて  
素晴らしい変化だね。これはきつとセレネちゃんの功績だよ。

とにかく昔のルナは今のルナとは全く正反対。それが、まさかこう  
なるとはねエ、って感じ。こんな紳士的なルナなんて、軍に居た頃  
は一度も見たことなかったしね。ホント、意外だなー。人って変わ  
るもんだよねエー」

「……一体何が言いたいんだお前は」

「べつつにいいー。随分とご執心ですネーってコトだ。……ああ、そ  
うだ。この家、部屋数ないから二人同室ネ。イイ？ セレネちゃん  
「ええ」

「あれー？ もっと動揺するかと思ってたんだけど」

セレネちゃんは一瞬きよんとするが、すぐにまたにつこりとした。  
「今までだってそうだったもの。気にするようなことじゃないわ。  
それで、どこのお部屋を使えば良いの？」

「あ、ああ。階段あがってすぐの部屋」

……いやいやいや。俺が動揺してどうする。しっかりしろよ俺。  
ていうかルナってばいつからこんなに手が早くなっちゃったのさ。  
「ありがとう。それじゃああたし、先に休ませてもらいますね。ケ  
ーキ、ご馳走さまでした」

ぺこりと礼儀正しく頭を下げて、セレネちゃんは部屋に入って行  
った。

「じゃあ、私も休ませてもらう。今日はありがとな」

カタン、と静かな音を立ててルナは立ちあがる。そしてセレネちゃんの後を追うように歩き出した。

「なあー」

「何だ？」

階段の途中で足を止め、振り向く。相変わらずの綺麗な金色。整った顔に、俺は尋ねる。

「もうヤツたの？」

「……派手に死ぬか？」

「じょーだん。それじゃあ、も一つ質問」

人差し指を立て、俺はからかうようにニツと笑った。

「いつから一人称『私』になったの？」

「……セレネに、出会ってからだ」

「ふうん」

俺は呟く。

「何が言いたい？」

「別に」

紅茶を一口すすり、ルナを見上げる。

「しっかり守ってやんなよ」

「言われなくとも」

そう言って、ルナも部屋に入って行った。

5

すっきりと晴れ渡る青空。

馬の上で、セレネちゃんはにこりと笑う。

「二日間、お世話になりました」

ルナの体に腕を回した格好のまま、ぺこりと頭を下げる。

「イイよ。その間、家事とかほとんどやってもらっちゃったしネ。返って有り難かった。それじゃあ、気をつけて」

ルナも無言で頭を下げ、そして手綱を取った。ゆるやかな歩みを始め、その姿はやがて見えなくなる。

「……バアーカ。」

二人の姿が見えなくなつて、俺は笑った。

「ねエ、これでイイの？ アーリマン」

サク、と雪を踏む音。

それと同時に、黒髪に黒い軍服の好青年然とした長身の男が家の影から姿を現す。

「ああ、上出来だ」

クスクスクス。

ああ、可笑しくて笑いが止まらない。その中で、俺は呟く。

「貪欲な鸚鵡、不滅の孔雀。そして……」

クスリと笑い、アーリマンはその後を続ける。

「自由気ままな渡り鳥」  
ワンダーフォーゲル

それに、俺は頷く。

「渡り鳥つてのはイイよねエ。」

彼等の中には国境なんて厄介なモノは無いんだ。自由に、行きたいところに行けるんだから」

「君の中にだつてないだろう？ ワンダーフォーゲル。君もいつだつて、どこの国にも行くことが出来るんだから」

「まあ、仕事の内容にもよるけどネ。……それにしても、今回はなかなか楽しい仕事だったネ」

「それは良かった」

「敵対する者同士から同時に仕事が来るなんて、あんまりないよ」  
「本当に」

匿って欲しいと言って来るヤツがいた。

そいつ等を捜して欲しいと言って来るヤツがいた。  
両方を取ったら、追う方が有利になった。  
ただそれだけの話。

「ホントは俺、ルナのことキライだったんだよね」  
「だろうな」

俺はまた、クスリと笑う。

「本当に、“渡り鳥”ってのはいいよねエ」  
「全くだ」

「仕事という大義名分のもとにキライな人間を墮としてやれるんだ。  
こんなにお得な仕事、なかなかないよ」

アギナルドもまた、クスリと笑う。

「……俺の勘は良く当たるんだ」  
「知ってるよ」

「お前のそういう性格も、実は大分前から気付いていた」  
「だろうネ」

「本当にあいつのこと嫌いだよな」

「俺は金持ちと顔のイイ男は全部キライなんだ。アーリマンも含めてネ」

「それはどうも」  
晴れ渡る青空。

日の光が新雪に反射して、きらきらと光る。

光の中には影がある。

光の外には影ばかり。

貪欲な鸚鵡は饒舌で、不滅の孔雀は栄華を極める。

「ねエアーリマン、俺にぴったりだと思わない？」

「ああ、ぴったりだ」

俺達はクスクスと笑う。

「……渡り鳥には『舶来の鳥』って意味もあるんだよ。…ねエ、フアド、マリア王女」



## 第五章 眞実を言及

1

え？ バレないように人を欺くにはどうすればいいか？

問えば、奴はにこりと笑ってこう言った。

「そんなの簡単だよ。まず最初に、自分を騙しちやえばいいのさ」

「まずは、自分を？」

あたしの定位置となつたファドの隣。腕にしがみつきながら、あたしはその言葉に首を傾げた。

人の行き来の激しい商工業の盛んな街。

たくさんの人、商人たちの客寄せの声、女の人、男の人、それに子供たち。たくさんの音にあふれている。賑やかで、華やかで、すごく楽しい。今までこうやって街を歩いたことがなかったから、世界にはこんなたくさんの人たちがいたのかと驚いた。この人たちにとってはいつも通りのごく当り前な風景なのだろうけれど、あたしにとってはすごく新鮮だ。

「そう。まずは、自分を信じ込ませる。自分で眞実だと、本当のことだと思いこんでいる内容を話しているのなら、それは嘘ではないだろう？」

追われている場合、自国では過疎地域　それでいて人の行き来が少なくない所　を選び、他国ではとにかく人の多い所を進むのが良いのだと、ファドに教えてもらった。それが一番、人の印象に残らない動き方らしい。人というのは案外見ているようで見ていないものなのだとも言っていた。

「そう、なの？」

あたしは、ん？　ともう一度首を傾げる。ファドはそうだな、とわずかに空を仰いだ。

「そうだな……、例えば、私が『月は巨大なチーズのかたまりで出ている』と信じているとする。そして、それを真実として何も知らない誰かに教えた場合、それは嘘を吐いたことになるだろうか」

「ならない……、かな」

「そう。後からそれが間違いだったと気が付いたとしても、その時の私にとっては、それが『事実』であり、『真実』なんだ。嘘を吐いているのなら、それはまあ相手の話し方や仕種で分かるけれど、事実を言っていると自分で思い込んでいたら、嘘を吐いているとは分らないし、気付きようがない。まあ、本当の答えを自分で知っているのなら話は別だけどね」

「ふうん」

あたしはクスリと笑って、なんだか詐欺師と話をしているみたいだと言った。

「そうかもしれないよ？　何にせよ、嘘を吐いたことのない人間なんかいない。たとえそれが、何かを守るための嘘だったとしてもね。フィオナだって、一度や二度くらいはあるだろ？」

「……そうね」

あたしは呟く。

悪戯な風があたしの髪を乱し、ファドのコートをなびかせた。

「ねえファド、昨日は一晩中歩いていたから疲れちゃった。セレンダインも疲れているみたいだし、そろそろ今日の宿を決めましょうよ」

「ああ、そうだな」

「ねえファド、考えていたんだけど、一番の詐欺師はあたしかもしれない」

こざつぱりとした、小さな宿屋。

部屋に入るなり、フィオナは寝台に腰を降ろし、そう言った。

「あたし、いつも自分のこと騙していたもの。今こんなに欲求通りの生活が出来ているのが不思議なくらい」

「……フィオナ、何を？」

「いつもいつも、自分の中に自分の感情を押し込めて、押し込めて……」

様子がおかしい。

「……大丈夫か？ 顔が、少し赤いみたいだ。熱があるんじゃないのか？」

こつん、と額を当てる。

熱い。

やはり馴れない旅をして疲れが出たのだろう。

「……やつぱり、熱があるな。辛いなら早く言ってくれば良かったのに。ちよつと待ってろ、今、薬を買って……」

「待って……」

袖を掴まれて、私は動きを止める。

「側に、いて欲しいの……」

フィオナを寝台に寝かせ、前髪を撫でる。

「……分かった。ここにいろよ」

手を握ってやると、フィオナは安心したように微かに笑い、そのまま眠りに落ちた。静かな寝息が小さな唇から零れる。額に濡らしたタオルを乗せてやり、もう一度前髪を撫でた。

……無防備な寝顔。

私はそつと、その唇をなぞる。

「マズいな」

今まで、『兄妹』として抑えていた。

今まで、その唇には触れないようにしていた。

こんなにも無防備だと、箍が外れてしまいそうになる。

「……本当に、マズい」

私は床に座り、寝台に寄りかかった。

この一線は、絶対に越えてはいけない。

「どうしろって言うんだ」

この気持ちは、どこにやれば良い。

やり場の無いこの気持ちは、一体どこに持っていけば良いんだ。ファイオナは、私を愛し、信じ、慕ってくれている。誰よりも、私のことを想ってくれている。なのに、私はそれに応える術を持たない。だからせめて誠実であろうと、努めてきた。

兄妹である以上この一線は越えてはならないと、心の中で何度となく繰り返しながら。

「……くそっ」

吐き捨てるように呟いて、私は一つ溜め息を吐く。

いつそ、押し倒してしまうことが出来ればどれほど楽だろうか。そんなことをする勇気もない癖に、私はそんなことを思っていた。くだらない、と私は天井を見上げ呟いた。

男をハムレット型とドン・キホーテ型とに分けたのは誰だったんだろうか。それなら、私はきっとハムレット型だろう。

……まあどちらにしても愚かなのには変わらないが。

少し自虐的にそう考えながら、私は床に座ったまま目を閉じた。

「……ん」

熱は下がったらしく、気だるい感じも消えていた。

あたしは少し目を開き、辺りを眺めた。

寝起きの、ぼんやりとした不鮮明な視界の中に、ファドの姿だけがやけにはつきりと鮮明に映る。

「……ずっと、側に居てくれたんだ」

冷たいだろくに、ファドは床に座って、寝台に寄りかかるようにして眠っていた。腕を組み、頭だけを寝台の上に預けている。

……綺麗な寝顔。

あたしは金色の前髪をちよつとだけ持ち上げ、穏やかな表情で眠るファドを見つめた。

こんな綺麗な優しい人、ファド意外に見たことない。  
怒らない、よね？

あたしは静かに寝台から降り、ファドの横に座った。

「……」

そしてゆつくりと、唇を重ねた。

窓から差し込む月明かり。

それは柔らかく二人を包む。

あたしは唇を離して、わずかに赤面した。

ファドはまだ規則的な寝息をたてている。その姿を見ていると、何だか自分がとんでもないことをしてしまったのではないかなどと思えてくる。

あたしはまた、ファドの寝顔をじつと見つめた。

「…ま、いつか」

互いに愛し合っているのだから、何の問題もないはずだ。

えへへ、と笑い、あたしは寝台から布団をはがしてファドに掛ける。そして自分もその横にぴったりとくっつき、瞳を閉じた。

こんなに近いところで眠るのは初めてでドキドキしていて、だけど、嬉しくて、暖かくて…。

ファドの肩に頭を寄せ、あたしは実感した。

幸せだ。

心から、そう思う。

「…あたしは、幸せだよ」  
大切にしたい。

今この瞬間が、本当に幸せだから。

『 どうだ、私の娘は』

その言葉に、俺はわずかに目を細める。にやにやと品のない笑みを浮かべて言葉を紡ぐそれは、ひどく、醜かった。

『愛しいのdarou? 好きなのdarou? 私の娘が、自分の、妹が』  
ああ、何で、どうしてこの男が。

『酷く滑稽だ。お前は愛しいと思う女にほんの少しも触れる事もできず、言葉を交わす事さえ叶わないのだ。ああ、愉快、愉快』

その言葉に周りが見えなくなった。俺と同じ金の髪と金の瞳で、悪辣な、品のない笑みを浮かべる。俺と同じ、フィオナと同じ色で歪むその顔を、俺は知らず切りつけていた。

.

嫌な夢を見た。

身体を起こそうと身をよじると、布団が掛けられ、すぐ横でフィオナが寝息を立てていた。少し焦りながら、けれど平静を装いながら立ちあがり、フィオナを寝台に寝かせ、布団を掛けた。

……今、何時くらいだろうか。

そう思い、部屋の隅に置かれた小さな時計に目をやる。

午前二時。

……もう寝つけそうにない。悪い夢を見たせいだろうか。それとも、すぐ隣にフィオナが寝ていたからだろうか。異常なほど目が冴えてしまっている。

「……………」

落ち付け、と軽く頭を振る。その一瞬、ぞわりと何かが背筋を這うような感覚がした。

……これは、予感?

いや、違う。確信だ。

扉の向こうの複数の気配。

すぐに分かる。

この感覚。……ああ、懐かしいとすら感じる。

かつて軍人だったとき、戦場に立っていたとき、最も身近に感じていた感覚。戦場では、誰もがそれを剥き出しにして剣を振るっていた。

戦場での記憶が蘇る。

久しぶりの感覚。

これは、殺気。

静かに剣を抜き、神経を研ぎ澄ます。

……三人。

いや、四人か。

しかし扉越しでも動きが雑なのが分かる。殺気ばかり一人前で気配の消し方も何もなっていないし、その上足音すら消していない。足を踏み下ろす度にカツ、コツン、と音を立てる。ぼそぼそ話し声まで聞こえてくる始末。わざわざ剣を使う必要はないだろうと、私は剣を鞘に納めた。

誰かに雇われたヤクザか何かだろうか。しかし、だとしたらこいつ等は一体誰に雇われたんだ？ まさか、居場所がバレた？ バレたのなら、一体誰が？ それが可能なのは、アイツくらいだが、しかし……。

いや、まあ良い。扉越しでも気配が分かるくらいだ。どうせ大したことはない。

「……フィオナ」

「……ん。何？」

「しっ、静かに。少しの間、布団をかぶって丸まっていて。極力動かないで、声も出さないで。すぐに済むから」

寝台の隅に座らせ、頭から布団をかぶせた。決して出て来ないようにと言って、扉の方に向き直る。

「それでは一つ、お手並み拝見といきましょうかね」

口角を歪め呟いた直後、四人の男達が怒声を上げ、勢い良く扉を蹴破って中に入ってきた。扉の蝶番が外れ、酷い音がする。こんな優男なら容易いな、などと余裕の笑みを浮かべる彼等を見据え、私はクスリと笑った。

「非常識ですね。深夜に寝込みを襲うのなら、静かに入ってくるのが常識でしょう？」

突進してきた一人の腹を蹴りつける。

そいつが二人の男の方によるめいたのを横目で見ながらもう一人の男の腕を引き、首筋に手刀を落とした。昏倒したそいつを足許に転がし、後ろから振り下ろされた剣をかわして鳩尾に膝を叩きこむ。そしてその勢いのままに最後の一人の頭部を蹴りつけると、そいつは後ろの棚に頭を打ち付けてその場に倒れ伏した。ビクリと一度痙攣すると、その男は動かなくなる。

「……まさか受け身すらまともに出来ないやつが来るとは、思いませんでした」

うつ伏せになっている奴を足で転がして仰向けにさせ、四人全員が意識を失っているのを確認。そして、フィオナに駆け寄った。

布団を剥がし、笑顔を向ける。

「大丈夫か？」

「うん。あたしは大丈夫。……あの、この人たちは？」

「分からない。だけど、早いうちにこの街から出た方が良いな」

フィオナは違う！ と叫び、私の服を掴んできた。

「そうじゃなくて、この人達、ちゃんと生きてるんだよね？ 死んでたりとか、してないよね？」

本気で心配そうに聞いてくるフィオナに、私は思わず吹き出してしまった。戦った後、敵の安否確認まで行われるものだとは！

「ねえ、ファドってば！」

「大丈夫だ。全員、気絶させただけだから。死んじやいないよ。そんなことより、早く逃げよう。エントランスの方は見張りがいるだろうから……」

ちらと、フィオナに視線を向けた。

「……いけるかな」

・

「……見張りは、居ないな」

ファドは部屋の窓から頭を出し、周囲を見回した。

「二階だし、まあ、なんとかなるか」

独り言のように言って、ファドはあたしの方を振りかえる。

「フィオナ」

「何？」

ファドの傍らに寄り、顔を覗く。

「何があっても、フィオナだけは守り抜くから」

そう笑って、ファドは人一人がようやく通り抜けられる程度の大  
きさの窓から軽やかに飛び降りた。

スタンっ、と小気味良い音を立ててファドは地面に着地すると、

あたしに向けて両手を広げた。おいで、と言うように。

「行くよっ」

「ああ」

窓枠を蹴り、飛び降りた。

唐突な浮遊感。直後の、急速に戻ってくる重力。

容易く、ファドはあたしを抱きとめる。そして、ファドはゲーム  
を楽しんでいるかのような楽しげな笑みを浮かべて走り出した。

「このまま運ぶよ」

あたしを抱いたまま馬小屋へ走る。セレンダインの背にあたしを  
乗せ、ファドもあたしの後ろに飛び乗ろうとした。

「おい、居たぞ！」

「えいつ！」

後ろからのガサツな声。剣を構えてこっちに走ってきたその大柄  
な男に向けて、あたしは靴を思いきり投げつける。

「うわっ！」

顔に当たり、その人は一瞬動きを止めた。

「ははっ。やるねフィオナ。 セレンドイン、行け！」

一声いなくて、セレンドインは駆け出した。後ろの方で、また誰かが叫ぶのが聞こえた。怒声があちこちで響き、街は半ば地獄絵図のようになる。

あたしはもう片方の靴も追ってくる人達に向けて思い切り投げつけた。

その時、あたしの視界に入ってきたもの。

似顔絵入りの指名手配書。

それが街の至るところにべたべたと貼り付けられている。

この二人を捉えし者に金一封贈呈

細部まで確認することは出来ないが、おそらく彼らの反抗心を煽るような内容がかかっているのだろう。ここは反抗心の強い人間の多い国だと、ファドが以前そう言っていた。『こんなことも出来ないのか？』というような煽り文句に、懷を満たすのに十分すぎる額の報奨金。それだけ揃っていれば、すぐに乗ってくるだろう。

しかし、昼間、街に入った時にはこんなものは貼られていなかった。街に入ったのを確認してから貼った？ ということは、まさか「ファドっ。もしかして、パロットさんって！」

「分かってる。おそらく、フィオナの想像通りだ。だけどその話は後で。取り敢えず今は」

横に接近してきた馬の脚を切りつけて転倒させ、正面から来たもう一人の男には小型のナイフを投げて足に傷を負わせる。馬から落ちたのか、後方で悲鳴が聞こえた。

「逃げ切るのが先決だ」

「月が明るくて良かったね」

追っ手を巻き、あたしたちは森の中へと身を隠した。

気付かれてしまっただけいけないので焚き火はせず、目立たないように黒いブランケットを頭からかぶって大きな木の下に二人で身を寄せる。

こんな時にこんなことを思うのは不謹慎かもしれないけれど、頭からブランケットを被っているファドはなんだか可愛い。靴のない足に、雪の冷たさがじんわりと染みてきた。

「まさかこんなに早く見つかるとは」

「うん。……パロットさん、だよ」

「だらうな。ごめん、認識が甘かった。あいつを少し、信頼し過ぎていたようだ」

ちらちらと雪が降り出した。少し寒いけれど、雪は足跡を消してくれる。あたしはファドの言葉に頷き、空を仰ぎ、気にしないで、と微笑んだ。半分に欠けてはいるけれど、月は明るく、煌煌と輝いている。

「ファドと共にいる限り、あたしは絶望なんかしないわ。『世の中には福も禍もない。考えよう一つだ』ってね。シェイクスピアもそう言っているわ」

「……考えよう一つ、と言われてもな」

苦笑するファドの顔を覗き込み、やっぱり可愛いとあたしは頷いた。

「追われているけど、あたしは不幸なんかじゃないわ。ファドと一緒にいられて、幸せ。それに、そのお陰でブランケットを被って、雪ん子みたいになってるファドを見れたんだもの。ふふっ、可愛いよ」

我慢できなくなつて、あたしはファドの頭を撫で回した。そのついでにブランケットからはみ出している金髪も、ちよいと指先で突いてみる。

ファドは耐え切れなくなったように吹き出した。しかもわずかに涙目になっている。

「可愛い、か？」

「うん、とつても」

はは、とファドは笑って、涙を拭った。そしてふうと息を吐き、口を開いた。

「人を欺くには、って話。昼間にしただろ？」

ファドは懐中時計を開きながらそう話し出した。懐中時計を覗くと、まだ二時半だった。あれからまだ三十分しか経っていないかったのか、とあたしは驚いた。もう二時間くらいたっているような気分ではいたのに。

「うん。まず自分を騙せば良いっていうやつでしょ？」

「ああ。あれはもともと、パロットに聞いた話なんだ。軍にいたときにね。二人で組んで仕事をする事も結構あった。敵国の視察とかでね」

あたしはこつん、と頭をファドの肩に置いた。ファドは横目であたしを見ると、また話を続ける。

「昔っから女癖が悪くて素行も悪くて性格も悪くて腕だけは良かったんだがある日突然飽きたから止めるとか言い出して辞表も出さず勝手に軍を辞めていった訳の分からない自由すぎる奴だった」

「……なのに、信頼してたの？」

少しぽかんとして、あたしはファドを見遣った。

「それでも、仕事だけはきっちりやる奴だったから。金さえ絡めば、いい加減な仕事をする事は一切なかった。今回も本当は仕事として頼んでいたんだ。少し、ほうがいとも思えるような金額を出して。

……まあ、裏目に出てしまったけど」

「……そっか」

「ああ。ごめん」

「大丈夫だよ。ファドと一緒に居られるのなら、あたしはどうなっても良いもの。ファドの傍に居られれば、ファドがいれば全然怖く

ない。あたしはそれで幸せだよ」

呟いて、あたしは周囲を眺める。

皆、どうか、あたし達を守って。追っ手を阻み、あたし達を守って。

動物たちに、木々に、全てに語る。

「……あれっ？」

あたしはもう一度周囲を眺めた。

「どうした？」

何も、反応してくれない。動物も、木も、星も、おしゃべりな風すらも応えてくれない。ただかかさかと、何かささやき笑うだけ。

「何も、応えてくれないの」

「え？」

風に揺れて、木々ががさがさと音を立てる。

お願い、静かに

「マリア」

その声に、ファドはゆらりと立ちあがる。あたしはその場に座ったまま、その人を見上げた。

「おとう、さま」

金色の髪に、金色の瞳。けれどその顔は、痛々しく包帯に覆われていた。

「マリア、こっちに来なさい」

「い、いや！」

サク、と雪を踏み、歩み寄る。高圧的な空気はそのままに、あたしに近づく。ファドはぼつりと、生きていたのかと呟いた。そして、一歩あたしの前にでて、お父様を睨みつけた。

「ここには、“マリア”なんて人間はいない。この人は貴方の娘の“マリア”じゃない。“フィオナ”だ」

静かに、ファドは言葉を紡ぐ。

「ファ、ファドっ」

ファドはお父様を思いきり睨みつけている。こんなところで、ここまで来て連れ戻されるなんて、絶対に嫌だ。あたしはもう“お人形”には戻りたくない。ファドと、別れたくない。

「……」

サクリ。サクリ。

足音が近づき、ファドのすぐ前でひたと止まる。

「娘を返してもらおう。そろそろ、恋人ごっこにも満足しただろう？」

「遊びのつもりは一切ない」

冷ややかに言い放って、ファドは剣に手を掛けた。

「帰れ」

「マリア、帰るぞ。兄妹では何をやっても所詮は真似事にすぎん」

…… 兄妹？

あたしはファドの後ろから出て、お父様を真っ直ぐに見つめた。

「フィオナ」

「一体何を仰っているのですか、お父様。確かあたしは、一人っ子だったと記憶しているのですけれど。あたしにはお兄様なんて人はいないわ」

わずかに目を細め、お父様は気だるそうに口を開く。

「使用人に産ませた私の子だ。ファド、そろそろ手を引け」

お父様は緩慢な動作であたし達に背を向け、歩き出した。

「マリア、帰るぞ」

着いて来い、とでも言うように少しだけ振り返り、そしてまた歩を進める。

「ファド、そんな、嘘でしょ？　嘘だよ？　そんなの、あたしとファドが、兄妹だなんて」

「……」

ファドは一步後ろに下がり、左右に首を振る。

「 事実だ」

「そんなっ」

それでも、とファドは呟く。

「それでも、フィオナは渡せない」

静かに、お父様の背中に言い放つ。

「ファド……」

こんな時なのに、その言葉が嬉しくて思わず笑みがこぼれる。ぴたり、とお父様は動きを止め、あたし達を見遣った。

「ならばお前などもう用なしだ。 アギナルド」

呟いて、誰かの名前を呼んだ。そして、複数の足音。

「後は頼んだ」

それだけを言い置いて、お父様はもと来た道を帰っていった。

「久しいな、“狼”」

アギナルドと呼ばれた黒髪の人、そう言って朗らかに笑う。着ているものから、スワラージの軍人だということが分かる。その後ろに控える三人の女性は、真っ直ぐにあたしを見つめてきた。

「……ファド？」

「後ろに隠れていてくれ」

呟いて、ファドは一步前に進み出る。

「何があっても、フィオナだけは守り抜くから」

4

スワラージの軍服を着た、頬に揃いの蒼い炎の刺青を持つ三人の女性。彼女達を眺め、ファドはわずかに目を細めた。

「 “ エリニユエス” か」

軍屈指の魔術部隊、“ エリニユエス”。

ギリシャ神話の三女神の名を与えられたその部隊の歴史はまだ浅

いが、実力はある。三人で一つの部隊を成すエリニユエスの力は、大隊のそれにも匹敵する。

エリニユエスが出てきてしまつては、グノースも拒むことは出来なかつただろう。国自体にもかなりの力があるし、それに、仮にも『武の国』スワラージの精鋭だ。入国を拒んだら、国の存続すら危ぶまれる。

ファドは静かに剣を引きぬいた。

「覚悟なさいませ、ファド・ギルト様」

一人が、かすかに笑う。

「我ら“エリニユエス”は復讐の三女神。罪を追求する三人の女神。

……貴方は、原罪にも近い」

一人が、無表情に言う。

「ほんとに綺麗ね。ちよつと惜しい気もするけど、王サマからの命令だから、恨まないでね？」

一人が、華やかに笑う。

「それでは、『死合』と洒落込みましょうか」

三人は同時に言った。

気持ちが悪いくらい、ぴつたりと揃えて。

「『死合』、か……。良いだろう」

刹那、ファドは駆け出した。

「！」

どこのものなのか分からない言葉を吐き出し、エリニユエスは薄く笑みを浮べる。

球状の炎や雷がファドを追いまわし、ファドはそれを軽やかにかわしながらエリニユエスに向かっていく。

「へえ、さつすがあ！ “血濡れの獵犬”の呼び名は伊達じゃあないね！」

後ろに飛びのいて振り下ろされたファドの剣をかわし、エリニユ

エスは言う。ファドはちつと舌打ちをして、再びエリニユエスとの間を詰める。

……どこか、楽しげに見える。

エリニユエスも、ファドも。

身近に迫る死の香りに、酔っているようにも見える。

フィオナはただそれを見つめていた。どうしようもない無力感。けれど、動くことも出来ず、声を出すことも口を開くことも出来ずに目を見開き、ただその戦いをじっと見つめていた。戦場とは、こういうものなのかと寒気がした。けれど、目をそらしてはいけないうような気がして、じっと、見つめていた。

舞のようだ。

アギナルドは四人の戦いを眺めながら、そう思った。

エリニユエスの紡ぐ呪文に合わせて炎や雷が空を舞う。それを弾く剣の一線がキラリと光り、獣じみたファドの瞳がエリニユエスを射る。

舞のように、軽やかに。

けれど、射るように鋭利に。

ぞわ……。

鳥肌が立つ。

“狼”と、俺を最初に呼んだのは誰だっただろうか。

死合。

そう。『試合』ではなく、『死合』だ。

命の遣り取りに試合などという生ぬるい言葉は使えない。そう、これは試合ではなく『死合』なのだ。

「せめてもの情けだ。苦しまぬよう、逝かせてやる」

ファドは酷薄な笑みを浮かべて呟くと、エリニユエスの喉に剣の切っ先を突き立てた。わずかな迷いもなく、真っ直ぐに。

雪で白く染まった世界に鮮血を散らし、静かに倒れる。首と体が

辛うじて繋がっている状態だ。おそらく即死だろう。

その瞬間を見ようとせせず、ファドはまた炎の球体と舞を始める。ファドの服は、赤く、血に染まっていた。

わずかに声量の欠けた呪文。

その中で、ファドは変わらずに舞い続ける。

「……っ！」

その呪文は鮮烈に、強烈に弾け、ファドの左肩をえぐり取った。  
「ファド！」

唐突に、呪縛が解けたかのようにフィオナは叫んだ。

力が入らなくなったのか、だらりとなった左腕をぶら下げて、ファドは苦痛に顔を歪めることもせず変わらずにエリニユエスへと向かっていく。

エリニユエスの放った炎が周囲の木々に燃え移り、夜の闇が唐突に照らされる。

それは、真っ赤な血液の色。漆黒にも近い色の影が、辺りを覆う。うごめくその様は、酷く不気味だった。

ぶわりと、熱風が頬を掠めていった。煙が辺りに黒い幕を作り、火花がちりちりと視界を歪める。赤い炎は、だんだんと強くなる。

まるで、戦いや血の臭いを求めるように。

「ファドっ、血が！」

「大人しくしていて下さい」

「……っ！」

駆け出そうとしたとき、柔らかな声と共に喉元に剣が当てられた。辛うじて傷がつかない程度の強さで、喉にぴったりと押しつけられる。

動けない。

少しでも動けば、少しでも口を開けば切り殺すぞという気配が、背後から漂ってくる。殺気、というのだろうか。戦場で、たくさんの兵が感じてきたであろう感覚。それはかつて、行かせてくれとせがんだ場所。

初めての感覚。それに、フィオナは成す術もなく息を呑み、身を縮めた。

「……少々心苦しいのですが、これも仕事なのでね」

おどけたように言って、アギナルドはちらりとファドに目をやった。明らかに、挑発している。貴方の恋人が死んでも良いんですかと。

「フィオナ！」

叫び、振り返りざまに剣を振りもつ一人の腹を絶つ。

腕に響く確かな手応えの後、胴と下半身が真つ二つになり、悲鳴を上げることもなくそれは転がった。

「貴様！」

真つ直ぐに、ファドの剣はアギナルドの心臓を狙う。

辺りに満ちる死の香り。

濃厚な血の臭いは、全ての感覚を麻痺させる。

「残念だけど」

アギナルドは柔らかに笑った。

「君の負けだよ、“狼”」

カクン、と崩れ落ちた。

その後ろには、女神達の生き残り。

糸の切れたマリオネットのように、ファドはその場に崩れ落ちる。

「“猟犬”も“狼”も“人間”も、“神”には勝てない」

一人になったエリニユエスは、そう呟く。

「ファ、ド？」

フィオナは目を剥く。

喉から剣が離され、フィオナはファドの腕にそつと触れた。

「ファド……、ファド、いや、やだ！ やだあ！」

閉じられた月の瞳。血にまみれた姿。背中に生々しく広がる焼け爛れた跡。えぐられた左肩。辺りに広がる血液の臭いに、赤い炎に

黒い煙。

そして、エリニユエスの手の中にある紅い心臓。

指の隙間から、血液が紅く滴る。

「まあ、猟犬も所詮は人間のペットだからね。利用価値がなくなればもう必要とはされない」

仕方ないよね、とアギナルドは言う。

「それじゃあ、そろそろ帰りますか。マリア王女、お手をどうぞ。僭越ながら、“狼”に代わり俺がエスコート致しましょう」

アギナルドの手を振り払い、フィオナはファドの体に縋り付く。

「イヤっ！ やだ、ファド、起きて！ 起きてよ！ 目を覚まして！」

「もう死んでいる。目覚めたりはしませんよ」

「ファド、ファド、お願いっ！ 目を覚ましてー！」

ファドの遺体から離れようとしないフィオナに、アギナルドは一つ溜め息を吐く。そしてフィオナの傍らに跪いて、にこりと笑んだ。

「何が、何がおかしいのよ」

「……まあ、魔法は使えませんが、俺にもこのくらいのことは出来るんですよ」

ポケットから懐中時計を取り出した。

力チ。

時を刻む、秒針の音。

「少しの間、大人しくして下さい」

力チ、力チ、力チ。

パチン。

指を鳴らす音と共に、フィオナは崩れ落ちた。

深い深い、悪夢の中に。

ぐちゃり。

ファドの心臓を、握り潰した。エリニユエスの生き残りは手の中

のそれを無感動に見やり、地面にたたきつけた。

「所詮は犬か。……惜しい男」

仲間の死を悼むでもなく、嘆くでもなく、復讐の女神はかすかに笑った。狂ったような、柔和な笑みを。

「行きましよう、アギナルド。我が悪神<sup>アイマン</sup>」

赤々と燃える炎に照らされながら、女神の生き残りは真つ赤な血液にまみれた腕でフィオナを抱き上げ、艶やかに笑った。

「そうだね。ここは少し、熱いから」

アギナルドも頷いた。

穏やかな、赤子にでも向けるような優しい笑みを浮かべながら。

## 第六章 暁の婚礼

1

城の一室であたしは一人、机に向かっていた。

硝子の万年筆をゆらゆらと所在無さに揺らしながら、月光がそれに反射して輝くのをぼんやりと見つめる。

少しだけ、見惚れる。

きらきらと光りを反射するその様は、とても綺麗だと思ったから。……けれど、あたしの思考はゆらゆらと違ふところばかりをさ迷う。

満ちていた月が半分に欠けるまでという短い期間、あたしは一人の男性と共に城を飛び出した。

鮮やかに輝く、綺麗な月のような瞳。

絹糸のように滑らかな金色の髪。

誰よりも、あたしを想ってくれた人。

最後まで、あたしを守ってくれた人。

そして、あたしのお兄様。

本当に、美しい人だった。

誰よりも、優しい人だった。

あたしは明日、結婚する。

相手は隣国、オーグランドの第三王子アレス様。

通り名は “ 鸚鵡 ” 。

・

「貴方が、“アレス様”なの？」

「お初にお目に掛かります、マリア王女」

あたしは思わず一步後ろに下がる。首筋に緑色の翼の刺青を持つその人は、晴れやかに笑って一步前に出て跪き、あたしの右手の甲に唇をあてた。

「そんな…貴方、どうして…」

「先日、国に戻ったんですよ。両親とも、それは喜んで迎えてくださいました。六年前に家を出た放蕩息子が、ようやく帰ってきてくれたと言って」

クスクスと、楽しげに笑う。

「マリア王女。……いや、それとも“セレネ”とお呼びしましょうか？」

ああ、本当に、貴方は実にお美しい方だ。貴方の前では、美の女神アフロディテさえも霞んで見えてしまうことでしょう」

「……」

あたしはただ無言で、青い瞳を見下ろした。

「今度こそお受けしてくださいませね、マリア王女。俺と、結婚して下さい」

「……手、離してください」

再び手の甲に唇を寄せようとするのを制すると、アレス様はああ、と呟いて立ち上がった。

「本当に清らかな方だ。まるで真白な百合の花のよう。」

……ああ、そうだ。式ときには、貴方に良く似合う大きな白百合のブーケを用意させましょう」

「……あたし、百合は嫌いな」

言い捨てて、あたしはその部屋を出ていった。

## 2

真珠に、ダイヤモンド。たくさんの宝石がじゃらじゃらと散りばめられた真つ白なウェディングドレス。  
長ったらしくて鬱陶しいヴェール。

華やかなティアラやネックレスなどのアクセサリーに、吐き気がするほど甘ったるい香りの、大きな百合のブーケ。

色鮮やかなステンドグラスのきらめく教会に、パイプオルガンの音色がゆったりと柔らかく響く。

その中で、あたしはお父様と腕を組み、赤い絨毯の敷かれたヴァージンロードを、ウェディングドレスの裾をずると引き摺りながら歩く。

お父様の横を離れて“パロット”の横に並ぶと、神父様は喜びに満ちあふれた晴れ晴れとした笑顔を浮べた。

気のせいかもしれないけれど、その笑みがどうにもわざとらしいもの見えてしまって、苛々してくる。だからと神父様が長つたらしいお話をしている間中、あたしはネックレスやヴェールの裾をいじくりながらぼんやりと突っ立っていた。こんな気だるげな花嫁など、きつとどこを探してもいないだろう。

素晴らしいわね、なんて素敵なのかしら。

幸せそうね。ほら見て、本当にお美しいわ。

辺りから、そんな会話が聞こえてきた。

……素晴らしい？　素敵？　幸せ？

何それ。

何処が？

本当にそんなふうに見えるのかしら。きつと目が悪いのね。

素晴らしいことも素敵なこと、ひとつだってないわ。不幸の絶頂。“結婚”というものがこんなにも不快なものだなんて、思いもしなかった。幸せだったら、こんな不機嫌の塊みたいな気持ちで不愉快な顔している訳ないじゃないの。

全く、何が幸せなのですか。

思いながら両サイドに広がる客席を見まわしたとき、その中にあたしはお婆様の姿を見つけた。

……黒いドレス。

お婆様は、まるでお葬式のように着るような漆黒のドレスを着ていた。その隣にはお婆様同様、黒いドレスに身を包んだエミリアまでいる。少しおどおどとしてはいるが、明確な意思を持ってそうしているように見える。お婆様に、何か聞いたのかもしれない。

黒は、死者を悼むための色だ。結婚式など、お祝い事の時に黒はご法度。そんなのは常識なのに。ふと、お婆様と目が合った。何かを期待しているような、どこか楽しい表情のお婆様を見て、あたしは思わず泣き出しそうになった。なんだか、ありがたくて。

小さいころから思っていたけれど、お婆様はすごい。全てを、見透かしている。

やっぱり、お婆様は魔女だから。

お婆様はあたしの方を見て微笑み、一つ頷いた。これからでしょう？ と問いかけるように。エミリアもかすかに口角を上げ、笑ってみせる。

そうだ、まだ泣いちゃいけない。

あたしはこの結婚式で道化を演じるのだ。

……大丈夫。

……大丈夫、出来る。あたしには心強い味方もいるのだから。

ねえファド、あたし、今でも貴方のことが好きなの。

こんな人と結婚なんて、絶対にしないわ。あたしは誰とも結婚なんてしないし、するつもりも一切ない。子供だつていないし、マリアなんて名前もいらない。あたしに必要なのは、ファドと“フィオナ”という貴方のくれた名前だけ。それ以外のものは、何ひとつ望まない。何も要らない。

こんな国、あたしの代で終わらせてやる。

全てに幕を閉じてやる。

今、あたしは道化だ。

全てのものに終焉を告げる道化師だ。

終わらせよう、全部。全部全部、何もかも終わらせてやる。

「病めるときも、健やかなるときも、生涯、互いに愛し続けることを誓いますか？」

神父様の言葉に、パロットはいと即答する。

……全く、忌々しいったらない。

でも良い。

これで終わるんだから。全部、終わらせるんだから。パロットにもお父様にも恥を掻かせて、笑いものにして、そして、終わらせてやる。そう思っ、あたしは少しだけ笑った。

さあ、ゲームをはじめよう。

楽しい楽しいゲームの始まりだ。

この式全部、めちやくちゃにしてやる。

今までのこと全部、今まで思っていたこと全部、何もかも全て思いつきりぶちまけてやる。あたしは百合の花びらを一枚千切り、手を離れた。百合の花粉が、真白な手袋をわずかに汚した。

ひらりひらりとそれは軽やかに揺れ、音もなく床に落ちる。

「マリア様、貴方は、誓いますか？」

「……あたしが、誓うとも思っているのですか？ この人との『永遠の愛』を？」

静かに、そう言い放つ。

この場所に居る、全ての人に聞こえるように。声を貼り、良く通る声で。

神父様は驚いたように目を見開いた。

あたしは“マリア”じゃない。“フィオナ”だ。ファドを心から愛し、ファドに心から愛されたひとりの女。

“マリア”はかつて、お人形だった時のあたしの名前。今この場所に、マリアなんて人はいない。あたしはもう、ガラスケースのお人形を気取るつもりはない。意思を持った人間として、あたしはここにいるのだ。

あたしは、フィオナだ。

「……誰が誓うのですか。大体、こんな人のどこをどう愛せと言

うのですか？ あたし達を騙したのですよ、この人は。あたかもあたし達の仲間みたいに振舞っておいて、容易く、呆気ないくらい簡単に、あたし達を裏切った最低な人です。愛せる要素が何ひとつないわ。こんな人を愛せと、こんな人と愛し合えとおっしゃるの？ 不可能よ。他に、あたしには好きな人が、心から愛している人がいるというのに。

……知っているのでしょうか？ あたしが男の人と駆け落ちをしたって話はもう有名ですね。その人の慰み者にされたとかって言う信憑性も何もない失礼極まりない噂もまことしやかに流れているみたいだけど。このまま式を続けたいのなら、あたしに誓いの言葉を述べさせたいのならその人を……、ファドを連れて来なさいよ。今すぐ！ ここに！ この人と結婚？ このあたしが？

……確かに “マリア” なら大人しく従っていたかもしれないわね。アレは、ただの飾り物のお人形だったから。だけどね、あたしはもう “マリア” じゃないの。あたしは “フィオナ”。あたしは “マリア” という名を、“王女” という地位を放棄し、投げ捨てた人間なの。あたしはもうあんたの娘でも何でもない。あんたの言う通りに動くと思ったら、大間違いよ」

神父様からお父様へと視線をやり、怒鳴り付けた。お父様は眉を寄せ、怒りに満ちた視線をあたしにぶつける。

『大人しくしている』

『お前は私の言うことを聞いていればいいのだ』

何度となく聞いた言葉。まるでそれが聞こえてくるようだ。あたしもお父様を睨み返した。初めて、はっきりと拒絶した。昔はあの瞳をとても恐れていたのに、今は全然怖くない。なんて馬鹿馬鹿しいのだろうと、冷めた視線を向けることができる。

「マ、マリア様！」

神父様は慌てたようにあたしの名を呼んだ。周囲がざわざわと騒がしくなる。構うものか。ここは舞台だ。あたしの、初舞台。何が何でもやらせてもらう。邪魔なんかさせない。

「マリア、落ち着いて」

パロットに手を引かれ、あたしはそれを振り払った。

「止めて。触らないで、汚らしい！……安心して、あたしは落ち着いているわ。これまでにないくらい、落ち着いている。それから、貴方に呼び捨てにされるのは……いいえ、名を呼ばれることすら気に入らないわ、止めてちょうだい。たとえそれがかつての名前であっても、あなたに呼びかけられることほど嫌なことはいわ。全く、不愉快極まりない」

ブーケから百合を一本抜き取り、パロットの顔に叩きつけた。

「……何を」

「百合の花は嫌いだと言ったでしょう？ 聞いていなかったの？」

一歩近付いてきたパロットを、あたしは思い切り睨みつけた。

「近づかないで。……残念だけど、貴方を愛することは神に誓って永遠にないわ。まあ、信じている神なんていないけれど。とにかく、あたしの一生を賭けても不可能ね。誓いの口付けなんかしうものなら今ここで舌嚙んで死んでやるから。あたしは誰の指図も受けたりしないし、誰のものにだってならない」

あたしはただ、思いの丈をぶちまける。

もう、止まらない。あたしを止められる人間など、ここにはいない。

「何よ、結婚も何もあたしの意志なんてまるでないじゃない、全部がお父様の独断じゃない！　なんで、なんで全部決められなきゃいけないのよ！　これはあたしの問題なの！　いい加減にしてよね、自分のことくらい自分で決められるわよ！　あたしは誰にも干渉されたくないの、あたしはお父様のお人形なんかじゃないの、あたしだって感情を持っているの！　あたしは、誰のものでもないわ！」

まるで意思のない人形のように扱われることの不快感を、屈辱を、あたしは嫌というほど知っている。

人として扱われないということがどんなことか、自分の無力を知るということがどれほど辛いことか、ここでは誰一人として分かる

うとしない。ここでは、自分の無力をどうにかしようとすることから許されない。

あたしはお父様に向けて言い放つ。これは復讐だ。何が何でも分かせてやる。分かせなければならぬ。

あたしは、お父様のものではないんだってことを！

「あたしは、あたしのものよ！」

分かせてやる。あたしの主は、あたしでしかないのだということとを！

ヴェールを半ば耑り取るみたいにして外して、腹いせに呆然としている神父様に投げ付ける。

ネックレスもイヤリングもブレスレットも全部外して力任せに投げ捨てていくと、ばらばらと小さな宝石たちが床に散らばっていった。そして最後に、手袋を外してアレス様の顔に思い切り叩きつけた。

勝負の開始を告げるように。

一つ息を吐き、あたしは続ける。

「……あたしが心から愛することが出来るのは生涯でただひとり、ファドだけよ」

あたしはパロットをひたと見据えた。

「確かにファドがあたしの実のお兄様だったって聞いたときは驚いたわよ。驚いたけど、だけど、あたしは彼が好きなの。誰がなんて言おうと、あたしが愛しているのはファドだけなの。……ファド以外の人と一緒になるなんて、有り得ない。特に、あなたとなんてお断り。顔を見ただけで虫唾が走る。絶対に嫌。死んでも嫌。全く、こんな薄ら寒い猿芝居、馬鹿馬鹿しくっていつまでも付き合っただけならいらないわ。冗談じゃないわ！」

本当に、冗談じゃないわよ。

やった。言いきった。

言いたいこと全部、言った。考えていた文章もなにもかもめちゃくちゃになっちゃったけど、だけど、言えた。初めてだ。そう思う

と、緊張の糸がぷつりと切れた。

あたしは崩れ落ち、その場に座り込んだ。

「ファドを返して。……返して！ 返してよ！」

なんだか色んな感情があふれてきてしまつて、抑えられない。

「ファド……、ファドっ！」

あたしは泣いた。

百合のブーケで床をばしやしりながら、大声で泣いた。

彼の名を叫びながら。

……愛しい人。

お願いだから、あたしの名前を呼んでよ。貴方のくれた、あの美しい名を。

あの美しい薔薇の名前を。

『私のフィオナ』

白い花びらがあちこちに鮮やかに散っていく。けれど、そんなことは別にどうだって良い。

……ねえファド。

早く、迎えに来てよ。

真っ白なフィオナを一輪持つて、あの時みたいに。あたしを迎えに来て。

『私のフィオナ』って、笑いかけてよ。

……ねえファド、お願い。

お願いだから  
…

## 終章 語り部は終焉を告げる（前書き）

これでラストです。

楽しんで頂ければ幸いです。

## 終章 語り部は終焉を告げる

さて皆様、今宵の物語はいかがでしたでしょうか？

嗚呼、かくも儚き物語。

憂いの月が良く似合う。

切。

語り部は小弦を爪弾く。

まだ明け遣らぬ空に、残月が浮かぶ。

儚き調べは風に乗る、有明の月にじわりと溶ける。

『恋とは甘い花のようなものである』

これは詩人、スタンダールの言葉で御座います。この言葉には続きが御座いまして、『それを摘むには恐ろしい断崖の端にまで行く勇気がなければならぬ』と。

甘く匂い立つ柔らかな花。それを摘む勇気が、一体どれほどの人にあるのでしょうか。けれど、ああ、全く言い得て妙。あの二人の恋物語を表すかのよう。

ああ、そうだ。

皆様はご存知でしょうか？

清らで可憐な白き薔薇、『フィオナ』の花言葉。

『恋の吐息』と言うそうです。

愛しい人に想いを寄せて零れる吐息。

儚いものです。

さて皆様、これでわたくしめの物語はお終いに御座います。わたくしめの持つこの小さな小さな物語の壺はこの通り、もう空っぽに

なつてしまいました。

月もそろそろお休みのご様子。

ほら皆様、ご覧下さい。

東の空がじんわりと、紅く色鮮やかになって参りました。

有明の月も真白で鮮やか。ああ、実に美しい。薄紅く染まったたゆたう雲も風流なもので御座います。

さて、お次はきらきらと眩しい太陽に相応しい、爽やかで晴れやかな物語でもいかがで御座いましょう？

わたくしめのこの頭の中には、物語の壺が百も二百も御座います故。

んん？　なんと、もう眠たい？

これはこれは。気付きませんで、大変な失礼を致しました。お美しいお嬢さまに、気高き紳士殿。皆々様の静かな夜、眠りの時間は、わたくしめのささやかな物語に姿を変えたのでしたね。

確かに確かに。

皆々様の瞳は、もううつらうつらと扉を閉じようとしていらつしやる。さすがにもうお疲れで御座いましょう。長い月夜に物語を紡ぐのと同様、朝日に身をゆだねるのもこれまた一興。

朝日と共に眠りに就く。

そんな贅沢をするのもたまには良いもので御座います。今日ももう、小鳥たちの子守唄に身を任せると致しましょう。

それではまた、いつかどこかでお会いできることを祈りつつ、これでお別れと致しましょうか。

それでは皆々様、良い夢を……。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1534r/>

---

フィオナ

2011年3月6日14時25分発行